あ

喉音にして單母音の一つ。う音ふ音に續く時は多くおうの如く發音せらる。

あ　あぜ。

あ　畔(名)　わ。❷われ。○記「あはもよ女にしあれば」

あ　吾(代)　あれ。❷かれ。

あ　(代)　あゝ。❶やあ。

あ　(感)

あい　愛(名)　いつくしみ。❷かはゆさ。❸情愛。

あい　哀(名)　かなしみ。

あゐ　藍(名)　(一)草の名。葉花共に蓼に似たるもの。葉を刈りて乾燥し。之を搾りて染草又は繪具と爲す。(二)染色の名。藍にて染めたるもの。青。

あひィ　逢(名)　あふ事。❷面會。❸對面。

あひィ　間(名)　(一)あひだ。❷あはひ。❸隙間。❹いとま。❺時間。(二)相手。(三)能樂の間に演ずる狂言。又は其演者。

あひィ　相(形)　双方互の。○「相引」「相槌」

あひィ　相(副)　(一)双方互に。○「相思ふ」(二)他人に對して敬語として用ふ。○「相かはらず御壯健」「御覽相なり候はゞ」

あひィいん　合印(名)　あひじるしとして押す印。❷割印。

あひィいろ　文色(名)　物のあやいろ。❷姿模樣。

あゐらふ　藍蠟(名)　染料の名。藍瓶に浮ぶ泡を製したるもの。

あゐばな　藍花(名)　草の名。露草の一名。

あひィはん　相判(名)　連名にて押す判。❷連印。

あひィばん　合判(名)　合印に同じ。

あひィぼれ　相惚(名)　相互に戀慕する事。

あゐぼう　藍棒(名)　繪具の名。藍を棒の如く製したるもの。搾りて用ふ。

あひィぼう　相棒(名)　駕籠の他の一方を舁く中間。

あいぼく　愛木(名)　寵愛の植木。❷秘藏の樹木。

あいべつりく　愛別離苦(句)　愛する人に離別するの苦(佛教)

あひィどの　相殿(名)　同じ神殿に他の神を祭り合はす事。❷合祀。

あいぢゃく　愛着(名)　深く心を染めて物を愛する事。(佛教)

あひィおい　相老(名)　夫婦めでたく一處に老ゆる事。

あひィおひィ　相生(名)　一つに生ひ立つ事。❷おないど

し。●同齢。

あゐかは

藍革(名)　藍にて染めたる革。

あひィかた

相方(名)　(一)相手となる人。(二)能樂などにて謠又は舞に合はする囃子。

あひィかん

合鑑(名)　切符。●手形。●券。

あひィかご

相駕籠(名)　一つの駕籠に二人相乘する事。

あゐがへ(ュ)し

藍返(名)　模樣のある織物又は革を更に藍にて染むる事。又は其もの。

あひィがさ

相傘(名)　相合傘。

あひィかぎ

合鍵(名)　常に用ふる鍵の外扣として造り置く鍵。●其鍵に合ふ樣に造りたる鍵。

あゐがめ

藍瓶(名)　紺屋にて藍を入れ置く瓶。●藍壺。

あゐがみ

藍紙(名)　藍色に染めたる紙。水に浸して汁を搾り出し繪の具又は染草とするもの。

あひィがも

間鴨(名)　(一)鳥の名。鴨と家鴨との間の子。(二)家鴨の一名。

あいよく

愛慾(名)　愛情と肉慾と。

あいよくとのゐぢ

愛慾貪恚痴(名)　愛情と慾心と貪る心と恚る心と愚痴なる心と。(佛教)

あひィよめ

相嫁(名)　夫の兄弟の妻。

あひィだ

間(名)　(一)物と物との中の處。●あひ。●あはい。(二)時間。

あひィだ

間(副)　手紙の詞。●に付●儘。●故。

あひィたい

相對(名)　總べて當人と相手と二人にての相談又は約束。

朝所(名)　あしたどころに同じ。

あいたどころ

相太刀(名)　双方互に太刀を打ち合する事。

あひィだち

(形。形狀言ク活)　愛敬なし。●愛相なし。(雅)

あいだちなし

(自動下二段)　あまねる。(雅)

あいだる

間夜(名)　男女相逢ふ事を隔つる其間の夜。

あひィだよ

(萬葉)

朝所(名)　あしたどころに同じ。

あいたんどころ

藍玉(名)　染料の名。藍の葉の搾り汁を玉にしたるもの。

あゐだま

合竹(名)　雅樂の詞。笙の數管の竹を同時に合はせ吹く事。

あひィたけ

(形。形狀言ク活)　あいだちなしに同じ。

あいだてなし

哀訴(名)　事情を訴へて宥恕を乞ふ事。●歎願。●情願。△(動)—哀訴す。

あいそ

愛相(名)　あいさうの略。(俗)

あいそ

愛相(名)　愛敬のある待遇。

あいさッう

あいぞう 愛憎(名) 愛する事と憎む事と。

あゐぞめ 藍染(名) 藍にて染むる事。又は其染めたる物。

あいつ 彼奴(代) あのやつ。●きゃつ。

あひィづ 合圖(名) 豫め定め置きて通知の爲めに行ふ手段。●信號。●知らせ。

あゐつぼ 藍壺(名) 藍瓶に同じ。

あひづち 相槌(名) 〔一〕鍛冶の鐵を鍛ふ時其相手となりて打ち合はす槌。〔二〕他人の說に同意を表する事。

あひィづくり 合作。共作(名) 共に働く人。●てつだひ。●助手。(古)

あゐねずみ 藍鼠(名) 藍氣鼠に同じ。

あひィなゞ 相嘗(名) あひなめに同じ。

あひィなゞまつり 相嘗祭(名) あひなめまつりに同じ。

あいなだのみ (名) 平斐なき賴み。●あてにならぬ望み。(雅)

あひィなめ 相嘗(名) 相嘗祭の略。

あひィなめまつり 相嘗祭(名) 禁中にて十一月上の卯の日に大和、住吉、大神、穴師、恩智、意富、葛木鴨、日前以下七十一座の神を祭らせ給ふ御神事。

あいなし 愛無(形。形狀言ク活) 愛相なし。●らちもなし。●くだらぬ。●何となし。(雅)

あいらし 愛(形。形狀言シク活) 愛すべくある。●かはゆらし。●いとし。

あひィむ(ン)べ 相嘗(名) あひなめに同じ。

あひィむ(ン)べのまつり 相嘗祭(名) あひなめのまつりに同じ。

あひィむこ 相婿(名) 妻の姉妹の夫。

あひィうち 相擊(名) 相戰ひて双方傷き又は討たるゝ事

あいの (名) 北海道の土人。古の蝦夷。

あひィのり 相乘(名) 車などに共に乘る事。

あひ のこ 間子(名) 父母種族の續りたるものゝ中に生れたる子。

あひィのて 相手(名) 俗曲にて唄の間に鳴物ばかりを奏する事。

あひィのきゃうげん 間狂言(名) 能の間に演ずる狂言。

あひィのしゅく 間宿(名) 街道筋の宿驛と宿驛との間にある小さき宿。

あひィくち 匕首(名) 鍔なしにして柄と鞘と直に接する様に作りたる短刀。

あひィくち 合口(名) 双方互に話の合ふ事。

あいぐるし (形。形狀言シク活) 度に過ぎて愛らしい。

あひぐせまひィ 相曲舞(名) 數人一處に同じ曲舞を舞ふ事。

あひィやど 相宿(名) 同じ家に宿る事。◆同宿。

あひィやどり 相宿(名) あひやどに同じ。

あひィやり 相鎗(名) 一の敵を二人以上の鎗にて突く事。

あひィま 間間(名) あひだ。◆すきま。

あいまい 曖昧(名) 判然せぬ事。◆不徹。◆不分明。△(形)—曖昧なる。(又)—曖昧の。(副)—曖昧に。

あひィまひィ 相舞(名) 數人一處に同じ舞曲を奏する事。

あゐけ 藍氣(名) 藍色を帶ぶる事。

あゐけねずみ 藍氣鼠(名) 染色の名。藍氣を帶びたる鼠色。

あひィことば 合詞(名) 秘密を保つ爲めに用ふる合圖の詞。◆暗號。◆符牒。

あいえん 哀猿(名) 哀しき聲に泣く猿。

あひィえん 合緣(名) 適當したる良緣。

あひて 相手(名) 相對して事に當る人。◆對手。

あひィてどる 相手取(他動四段) 訴訟などにいふ詞。相手とする。◆被告人とする。

あひィでし 相弟子(名) 師を同じうする弟子同士。◆同門。◆同窓。

あひィあひィがさ 相合傘(名) 二人一つの傘にはひる事。

あいさつ 挨拶(名) (一)人の間に對しての返答。(二)返禮。◆答禮。

あいざん 愛餐(名) 愛以美教會にて信者互に愛を增さん爲め麵包の類を食するの式。(基督教)

あひィぎぬ 間着(名) 女の禮服。襠の下に着る上着の稱。

あいきゃう 鰯鮓(名) (一)一年越の鮎。(二)鹽漬の子持鮎。

あいきゃう 愛敬。愛嬌(名) 顏などにあらはる、愛らしさ。◆にこやかに人づきのよき事。

あいきゃう 愛敬(名) (一)あいきゃうに同じ。(二)愛敬の餅の略。

あいぎゃうのもち 愛敬の餅(名) 中古の俗。婚姻の

後三日に妻の家に贈る餅。

あひきやく 相客(名) 一所に來合はせたる客。

あひぎこえ 相聞(名) 戀の歌。……後世は戀といへば男女の間のみなれど是は父子兄弟君臣朋友すべてを含む。(萬葉)

あいし 愛子(名) 深く愛する子。◆まなご。

あひじるし 合印(名) 總て容易に見分け得る爲め付くる目印。

あひしらひ (名) あへしらひに同じ。

あねしらぢ 藍白地(名) 白地に藍の紋あるもの。

あひしらふ (他動四段) あへしらふに同じ。

あひしやう 合性(名) 性のよく合ふ事。

あいじやう 愛情(名) 愛する情。◆いとしと思ふ心。

あいじやう 哀傷(名) 死を哀しむ事。

あいしふ 愛執(名) 深く心を染めて物を愛する事。(佛教)

あひびき 相引(名) 戰爭にて相互に引き退く事。

あいぜん 愛染(名) 明王の一つ。獅子冠を戴き手に弓矢五鈷を持ちたる姿。(佛教)

あいす 愛(他動サ變) (一)いつくしむ。◆かはゆがる。◆愛らしく思ふ。◆賞する。(二)敬慕する。◆敬愛する。

あねずり 藍摺(名) 藍にて模樣を摺る事。又は其摺りたる物。

あねずり 藍摺(名) 青摺に同じ。

あろ (自動) 有るの轉。(萬葉東歌)

あろじ 主(名) あるじに同じ。(雅)

あばる (自動下二段) (一)荒れ果つる。◆あばらやになる。(二)亂暴する。

あばた 菊石(名) 顏に殘りたる疱瘡の痕。◆いも。◆じやんこ。

あばれもの (名) 亂暴人。

あばら 肋(名) (一)肋骨のある處。(二)橫腹。

あばら (名) あばら屋になりたる事。△(形)—あばらなる。(副)—あばらこ。

あばらぼね 肋骨(名) 骨の名。胸の左右にあるづゝの弓形の骨。胸廓を圍むもの。

あばらや (名) 荒れたる家。

あばむ (他動下二段) あはむに同じ。

あばく (他動四段) かばふ。◆擁護する。(撰集抄)

あばく 發(他動四段) 隱れたるものを掘り出す。

あはやのをぶね 足早小船(名) 足の早き舟。(萬葉)

あに 兄(名) 同腹の男子にして其人より年長なるもの。又は之に準じたるもの。
豈(副) 何として。●いかでか。●どうして。
あによめ 兄嫁(名) 兄の妻。
あにご 兄御(名) 他人の兄の尊稱。
あにでし 兄弟子(名) 我より先に門人となりたる古弟子。
あにき 兄(名) 〔一〕兄君の意。兄の尊稱。〔二〕轉じてはたゞ兄の意。
あはう 阿呆(名) 馬鹿げたる事。又は其人。●愚人。●痴人。
あばう 阿防(名) 阿防羅刹の略。
あばうらせつ 阿防羅刹(名) 地獄にて罪人を呵責する獄卒の名。牛頭人首牛蹄なるもの。(佛教)
あはうらし (形。形狀言シク活) 馬鹿らし。
あべい (自動) 有るべきの轉。(雅)
あべかはもち 阿部川餅(名) 食品の名。餅に黄粉と砂糖とを附けたるもの。駿州阿部川の名物。
あべたちばな (名) 木の名。柚に似て小なるもの。(和名抄)
あへん 阿片(名) 劇藥の名。罌粟より製出するもの。多くは麻醉劑として用ふ。

あと 跡(名) 〔一〕物事の過ぎ去りたる所に殘る形。○「足あと」「あとが附く」〔二〕物事の過ぎ去りたる後又は以前。〔三〕死後。〔四〕うしろ。●背面。〔五〕足の方。●尾の方。〔六〕終り。●末。●末尾。〔七〕例。●模範。●形。〔八〕手跡。
あと (副) 何と。●いかに。○萬葉「あと思へか」
あど (名) 能の狂言にて仕手の次に位する役者。●ワキ。
あとばか (名) 跡方。(雅)
あとはかなし (形。形狀言ク活) 跡方なし。(雅)
あとばら 跡腹(名) 〔一〕産の後の腹の痛み。〔二〕轉じて總べて事の過ぎ去りて後に來る苦痛。
あとばこ 跡箱(名) 德川時代大名の行列にいふ詞。其格式によりて自身乘馬又は駕籠の後に挾箱を持たする事。
あとべ 跡邊(名) 足の方。●後の方。●後部。
あとどり 跡取(名) 其家を嗣ぐべき人。●相續人。●嗣子。
あとどころ 跡所(名) 古き名所。●舊蹟。

あとぬし　跡主(名)　後の世の主の意。◎彌陀如來。(佛足石歌)

あとたる　跡垂(自動四段)　垂跡をなす。……すゐしゃくを見よ。○新後撰「まくもくの珠城の御代にあとたれて宮居ふりぬる五十鈴川上」

あとつぎ　跡繼(名)　其家又は其技藝を繼ぐべき人。

あどなし　(形。形狀言ク活)　あどけなしに同じ。

あどらふ　謎(他動下二段)　あつらふに同じ。

あどふ　聘(他動下二段)　娶る。(紀)

あとふ　誂(他動下二段)　あつらへる。(雅)

あどうがたり　(名)　後語の意。◎しりうごとに同じ。◎饒言。(空穗)

あどうつ　(自動四段)　人の話に口を添へて調子を附ける。◎話の助聲を爲す。○拾玉集「きぞといはゞ誠にさうとあどうちてなやうやといふ人だにもなし」

あとのり　跡乘(名)　馬に乘りて主人の跡より供する事。又其人。◎後駒。

あとのな　跡名(名)　後代の名。

あとのまつり　跡祭(名)　其期に後れて間に合はざりし事。

あとまくら　跡枕(名)　(一)足の方と頭の方と。○狹衣「あと枕も知らずかき伏し」(二)足の先(又は尾の端)より頭まで。○平家「あと枕は十五丈もあるらんと思ゆる大蛇」

あとげつ　跡月(名)　先月。◎去月。◎前月。

あどけなし　(形。形狀言ク活)　幼兒などの無邪氣なる有樣。

あとこゆ　(自動下二段)　またいで越ゆる。(紀)

あとあし　後脚(名)　四脚ある動物の後部の二脚。

あとざん　跡産(名)　のちざん。◎胞衣。

あとめ　跡目(名)　(一)跡。○盛衰「味方のものども多く跡目につきて集まり來る」(二)跡を繼ぐ人。

あとゐふ　(他動四段)　誘ひ立つる。◎伴ふ。○萬葉「あさもひに漕ぎゆく舟は」

あどすすか　(句)　何としてか。○萬葉「小菅ろのうら吹く風のあどすすかかなしき子ろを思ひ返さむ」

あち　彼方(代)　我方に遠き方。◎あなた。◎かなた。◎むかふ。

あぢ　鯵(名)　魚の名。鰺に似て皮薄く尾より頭まで刺

あち　味(名)　鳥の名。あちがもの古名。

あぢ　味(名)　舌にて感じ得るもの。甘、辛、苦、酸、うまさ、まづさの類。

あぢはひ　味(名)　(一)あぢに同じ。(二)面白み。◉妙味。◉趣味。

あぢはふ(ワヒ ワヒ)　味(他動四段。又は下二段)　(一)舌にて味を試むる。◉味をみる。(二)趣味を以て深く考ふる。◉翫味する。

あぢがも　味鴨(名)　鴨の一種。形鴨に似て頭青く翼灰色に胸樺茶色なるもの。

あぢら　(代)　あち。◉あなた。◉かなた。

あぢむら　味村(名)　味鴨(あぢがも)の多く集まり居るを云ふ。(萬葉)

あぢむらの　味村の(枕)　騷ぐの枕詞。水に多く浮び居て立ち騷ぎひまなきものなれば云ふ。○萬葉「あぢむらのさわぎきほひて」

あぢまさ　檳榔(名)　木の名。びりゃうに同じ。

あぢさゐ　紫陽花(名)　灌木の名。夏の半ば四瓣にて群がりたる花咲き其色種々に變化するもの。

あぢさはふ(ヤツ ヤツ)　味澤相(枕)　め音に掛かる枕詞。○萬葉「あぢさはふ妹が目かれて」同「あぢさはふめづらし君が」

あぢきなし　(形。形狀言ク活)　役にも立たぬ。◉無益な。◉無用な。◉つまらぬ。◉面白くも無し。○古今「宿近く梅の花うゑじあぢきなく主定まらぬ戀せらるはた」新後撰「あぢきなく又有明やつらからんこれを限の別ならずは」玉葉「あぢきなし有り經しすべてうき世かな思ふ心に人は叶はず」

あぢちめ　阿知女(名)　禁中神樂の作法の名。

あり　蟻(名)　虫の名。地中又は朽木に群がり住み春より秋までの間各任務を分ちて勞働し冬籠りの食糧を蓄ふるもの。

あり　有。在(名)　有る事。◉現在。

あり　有。在(自動ラ變)　(一)存在する。(二)居る。(三)ながらへる。◉生きて居る。(四)人爲をあらはす動詞の上に輕く添へて云ふ詞。○「ありはす動詞の上に輕く添へて云ふ詞。○「ありがよふ」「ありたつ」「ありならぶ」(古)

ありはつ　有果(自動下二段)　有りおふせる。◉有りて終まで通す。

ありどころ　在處(名)　在る場所。◉居どころ。

ありとある（句）　有る物のこらず。

ありわたる　有渡（自動四段）　有りて渡る。●渡る。（萬葉）

ありわぶ　有詫（自動上二段）　居りづらくなる。●居にくゝなる。●住むがいやになる。○伊勢「京にありわびて」

ありか　有處（名）　其の在り場所。●其人の居所。

ありがよふ　有通（自動四段）　有りて通ふ。●通ふ。○萬葉「濱をよみうべも汐焼くありがよひ見ますもしるし清き白濱」（歌詞）

ありがたち　有形（名）　目前に有る形。●形。●容貌。

ありがたし　有難（形。形狀言ク活）　〔一〕有る事の難き。●稀なる。●めづらし。（雅）〔二〕辱し。●勿体なし。●謝すべし。

ありがね　有金（名）　有合の金。●現金。

ありがて　有難（自動）　ながらへて有り兼ぬる。○齋古今「玉くしげ三室外山のさねかづらさねずばつひにありがてましを」

ありがも　毳氈（名）　毛氈の類。（紀）

ありかず　有數（名）　有る丈の數。●全數。

ありやう　有樣（名）　有る樣子。●有體。●實際。

ありだか　有高（名）　有金の高。

ありたたす　有立（自動四段）　有りて立ち給ふ。●立ち給ふ。○萬葉「埴安の堤の上に。ありたたし見し給へば」（歌詞）

ありたつ　有立（自動四段）　有りて立つ。●立つ。○萬葉「ありたてる花橘を」

ありたけ　有丈（副）　あるかぎり。●悉皆。

ありたもとほる　（自動四段）　ありてたもとほる。●めぐる。（萬葉）

ありそ　荒磯（名）　あらいそ。（歌詞）

ありそわ　荒磯回（名）　荒磯のほとり。

ありそうみ　荒磯海（名）　荒磯のある海。（歌詞）

ありづか　蟻塚（名）　蟻の砂を盛りて作りたる巣。

ありつかはし　（形。形狀言シク活）　いかにも左こそあらまほしく思ほるゝ。●あゝ有りたいと羨まるゝ。（雅）

ありつく　有付（自動四段）　居付く。●住み付く。●似付く。

ありならふ　有習（自動四段）　有りて其事に慣るゝ。●習慣となる。○大和「本の妻なんかくてありならひにければ」

ありなむ
ありなしに
（他動四段）　有り歇む。●いなむ。（萬葉）
有無に（副）　あるかなきかに。●かすかに。（雅）

ありなしのひ
有無日（名）　中古の頃五月廿五日は村上天皇の御忌日なるを以て政務は休ませ給ふ定なりしに繁忙の折は臨時に行はるゝ事もありしかば有ったり無かったりするの意にて此日を名づけたる詞。

ありなしぐも
有無雲（名）　有るか無きか分らぬ程のかすかなる雲。（夫木）

ありのどわたり
蟻戸渡（名）　〔一〕蟻の行列。〔二〕蟻ならでは通れぬ程の左右絶壁に臨みたる山中の細道。

ありのたトふツ
蟻塔（名）　椽の下杙木の洞などに造りたる蟻の巣。其大なるは六七尺に過ぐるものあり。

ありのまがひィ
（名）　物など多くあるために紛るゝ事。

ありのまま
在儘（名）　現に在る通を少しも變へぬ事。●有體。●其儘。

ありのみ
有實（名）　梨の實の異名。◎ありは無しの反對にて目出度く呼び替へたるもの。

ありのひぶき
（名）　草の名。桔梗。（和名抄）

ありく
歩（自動四段）　あるくに同じ。

ありぐるし
有苦（形。形狀言シク活）　居ぐるし。●居にくし。（狹衣）

ありぐこりや
（名）　此と彼と轉倒する事。●あっちこっち。

ありまつ
有待（自動四段）　有りて待つ。○萬葉「幸くてありまて」

ありふ
有經（自動下二段）　ながらへて月日を經る。

ありふる
有觸（自動下二段）　世間一般に多くある。●最も普通になりて居る。

ありてい
有體（名）　有の儘の體。●實際。●實情。△（形）―有體なる。（副）―有體に。（俗）

ありあやひィ
有合（名）　有合ふ事。又は其物。

ありあり
（副）　目前に現在。●あざやかに。（又）―ありゝと。

ありあふ
有合（自動四段）　折よく丁度其場に在る。

ありあけ
有明（名）　〔一〕月の空に有る儘夜の明くる事。又は空にある月。〔二〕夜明し燈し置く燈火。

ありあけがた
有明方（名）　有明の頃。●明方。

ありさる　有去(自動四段)　有りて日を送る。○萬葉「有り去りて後も逢はんと思へこそ露の命も繼ざつゝ渡れ」

ありさだまる　有定(自動四段)　有り付きて定まる。

ありさま　有樣(名)　現在の樣子。●體裁。●景況。●現況。

ありき　歩(名)　あるきに同じ。●歩行。

ありきぬの　(枕)　さゐ〳〵沈みさゐ〳〵しづみ賓の子らありてのちにもなどの枕詞。(萬葉)

ありきたり　在來(名)　是まで通り。●ざいらい。●元の儘。

ありうり　亞流(名)　其跡に續く程の人物。

ありもどく　(他動四段)　有りてもどく。●もどく。(蜻蛉)

ありす　有巢(名)　巢に同じ。○萬葉「神なびの森のありすの時鳥一聲きかで時や過ぎなん」

ありすがた　有姿(名)　目前に有る姿。●姿。

ある　或(形)　確に其れと明言せぬ物を指さして云ふ詞。●某の。●一の。○「ある人」「ある時」「ある書」

ある　有。在(自動四段)　有りに同じ。

ある　生(自動下二段)　うまるに同じ。

ある　荒(自動下二段)　(一)亂暴する。●あばれる。(二)こはれ亂るゝ。●あばらになる。

あるひは　或(接)　又は。●若しくは。

あるひは　或(副)　事によらば。●若しや。●ひよつとしたら。○「人或は言はん」

あるへいたう　有平糖(名)　干菓子の名。砂糖を練りて種々の形に造りたる上等のもの。

あるべかし　(形。形狀言シク活)　いかにも有るべき樣である。●あゝ無くてはならぬ。○源氏「人から花やかにあるべかしき十餘人」

あるは　或(接)　あるひはに同じ。

あるく　歩(自動四段)　足を運びて前に進む。●あゆむ。●ありく。●歩行する。

あるこうる　(名)　蘭語より來れる。◎藥品の名。燒酎を蒸溜して得たるもの。

あるき　歩(名)　あるく事。●あゆみ。●徒歩。●散歩。

あるみ　(名)　金屬の名。光彩は金に似て赤みを帶び金よりは下品に眞鍮よりは上品なるもの。種々の細工に用ふ。

あるじ　主(名)　其家の主たる人。●主人。

あるじ 饗(名) 饗應。●馳走。●振舞。

あるじまうけ 饗設(名) 饗應の準備。●振舞の用意。

あを 青(名) 〔一〕色の名。五色の一つ。遠山の霞みたるが如き色。●藍。〔二〕綠色。○「青松葉」「青竹」〔三〕馬の毛にては黑色。

あを 穢(名) あうに同じ。をの部カヲの處を見よ。

あた 青(形) 未熟の。●若輩の。○「青公家」「青書生」

あをゐ 青藍(名) 草の名。太藍。

あふひ 葵(名) 〔一〕草の名。葉は鋸齒にて美しき五瓣の花咲くもの。〔二〕加茂祭に用ひらるゝ草。二葉の葵。〔三〕重の色目の名。表薄青、裏薄紫。〔四〕紋の名。二葉葵の形。〔圖〕

あをいろ 青色(名) 〔一〕麴塵。〔二〕六位の袍。綠色なるもの。

あふひかづら 葵鬘(名) 加茂祭に葵を髮にかざす事。

あふひぐさ 葵草(名) 草の名。加茂葵の一名。

あふひまつり 葵祭(名) 四月中の酉の日に行はるゝ京都加茂神社の祭。此日はすべて二葉葵を以て神前を始め人々家々の裝飾となす。

あはば 青羽(名) 鴨などの青き羽。

あはは 青葉(名) 〔一〕青々したる草木の葉。〔二〕古代横笛の名。葉二つの一名。

あはど 青鳩(名) 鳥の名。鳩の類にして綠色深く山に住むもの。

あはどり 青羽鳥(名) 鴨の異名。

あはばな 青花(名) 草の名。露草の一名。

あはに 青鼻(名) 青色の鼻の液。小兒の出すもの。

あはに 青土(名) 〔一〕綠色の土。〔二〕繪具の名。綠青。

あはに 青丹(名) 〔一〕染色の名。濃き青に黃をさしたる色。〔二〕重の色目。表は濃き青色、裏は薄青。

あはにうば 青女房(名) 年若き女房。

あはによし (枕) 奈良の枕詞。○萬葉「青によし奈良山越ね」

あはにぶ 青鈍(名) あをにびに同じ。

あはにさい 青二才(名) 若輩の男子を卑しみて呼ぶ稱。

あはにぎて 青和幣(名) 古は青色の織物。後世は青き

紙の幣。神事に用ふ。

あをにび 青鈍(名) 〔一〕染色の名。青みを帶びたる鼠色。〔二〕重の色目の名。裏表共に濃き青色。

あをへど 青反吐(名) 青色の嘔吐物。(竹取)

あをど 青砥(名) 砥石の一種。色青く質の密なるもの。硯にも用ふ。

あをだうしん 青道心(名) 昨今佛道に入りたる心。● 生若き道心。

あをどさ 青土佐(名) 紙の名。土佐より産する藍色の紙。襖など張るに用ふ。

あをぢ 青地(名) 一面に青き織物などの地。

あふり 障泥(名) 馬具の名。革又は布にて作り馬の腹に垂るゝもの。

あふりぼ (名) 風にあふらるゝ戸。(神樂歌)

あふぬく 仰向(自動四段) あふむくに同じ。

あなる (自動四段) 我乘りたる馬を鐙もて蹴る。

あふる (自動四段) ひら〳〵と動く。

あふる (他動四段) 鐙を踏みて馬を進むる。

あたわらは 青童(名) 若輩の童。

あたがひ 青貝(名) 螺鈿に同じ。

あをかち 青褐(名) 染色の名。褐色の青みを帶びたるもの。

あをがれいろ 青枯色(名) 重の色目の名。表黄、裏淺黄。

あをかづら 青葛(名) 山野に長く延び廣がる蔓草の名。葉は丸く又は楕圓にて春の末より小さき花さく。● あをつづら。● さねかづら。

あをからかみ 青唐紙(名) 重の色目の名。表の堅は薄青、横は萌黄、裏は青。

あをがへる 青蛙(名) 蛙の一種。綠色なるもの。

あをがさ 青傘(名) 日傘の一種。藍色紙にて張りたるもの。

あをがきやま 青垣山(名) 垣の如く國の四方を取り圍む青山。(記)

あをかすげ 青糟毛(名) 馬の毛色の名。糟毛の青みあるもの。

あをた 青田(名) 稻の青々と茂りたる田地。

あをたま 青玉(名) 青色の玉。

あをだけ 青竹(名) 切りたての青々としたる竹。● 生竹。

あをそ 青麻(名) 青き皮の處を取りたる麻。

あをそら 青空(名) 晴天の空。● 青天。

あをつ（自動四段）　燈のまたたく。

あをつばき　青椿（名）　葉の青々と茂りたる椿。

あをづか　青塚（名）　青々と草の生ひたる塚。

あをつづら　青葛（名）　草の名。あをかづらに同じ。

あをつづら　古着（枕）　くるとといふ詞の枕詞。葛を繰るの意。

あをな　青菜（名）　青々としたる菜。

あをなみ　青波（名）　青く見ゆる波。

あをむ　青（自動四段）　青色になる。青色を帶ぶる。

あふむく　仰向（自動四段）　仰ぎ向く。上を見る。

あをむぎ　青麥（名）　青々と茂りたる麥。

あをむし　青蟲（名）　虫の名。菜などに害をなす青色のもの。

あをうり　青瓜（名）　野菜の名。瓜の一種。白瓜に似て色綠なるもの。

あをうなばら　青海原（名）　青々としたる海原。

あをうま　青馬（名）　〔一〕黑馬。〔二〕白馬節會に用ひらるゝ馬。

あをうまのぢん　白馬陣（名）　禁中春華門の一名。白馬節會の日左右馬寮の官人の並び居る處。

あをうまのせちゑ　白馬節會（名）　はくばのせちゑを見よ。

あをうめ　青梅（名）　未熟の梅の實。

あをうみ　青海（名）　青青と見ゆる海。

あをのり　青海苔（名）　海苔の一種。深綠色にて水底の石に群がり生ずるもの。

あふのく　仰向（自動四段）　あふむくに同じ。

あをのま　青馬（名）　〔一〕青毛の馬。〔二〕催馬樂の曲名。

あふぐ　扇（自動四段）　扇の類を動かし風を起す。

あふぐ　扇（他動四段）　扇の類を動かして風を送る。

あふぐ　仰（他動四段）　〔一〕見上ぐる。あふむく。〔二〕上を見る。高く望む。〔三〕尊敬する。奉仕する。

あをくちば　青朽葉（名）　重の色目の名。表青、裏朽葉色。

あをくさ　青草（名）　青々と茂りたる草。

あをくさし（形。形狀言ク活）　草葉などに似たる匂のする。

あをくび　青首（名）　青く光る毛のある鴨、家鴨などの首。

あをくも　青雲（名）　青々と見ゆる空。青空。（枕詞式）

あをくものあをやか　青雲の（枕）　白肩の津の枕詞。（記）
青き有樣。（形）―あをやかなる。（副）―あをやかに。

あをやなぎ　青柳（名）　（一）あをやぎに同じ。（二）重の色目の名。裏表共に濃き青色なるもの。

あをやま　青山（名）　青青と木の茂りたる山。

あをやぎ　青柳（名）　（一）青々と茂りたる柳。（二）催馬樂の曲名。

あをまめ　青豆（名）　豆の一種。青みを帶びたる大豆。
青黄粉などに造るもの。

あをぶち　青淵（名）　赤色の青黑く見ゆる淵。●深淵。

あをふしがき　青柴垣（名）　青き柴にて作れる垣。（紀）

あをごま　青駒（名）　青毛の駒。

あをゑ　青畫（名）　青色に燒き付けたる陶器の繪。

あをあを　青青（副）　青色又は綠色の濃き有樣。（文）―青々と。

あをあらし　青嵐（名）　陰曆六月頃に吹く嵐。

あをさば　青鯖（名）　魚の名。―さばに同じ。（和名抄）

あをざし　（自動下二段）　青白き色になる。

あをざむらひ　青侍（名）　若輩の武士。

あをさぎ　青鷺（名）　鳥の名。鷺の一種にして形大きく脊の色青きもの。

あをぎり　青桐（名）　木の名。桐の類にして幹も枝も外皮の綠色なるもの。

あをきた　青北（名）　陰曆八月頃吹く北風。

あをめわた　青梅綿（名）　綿の一種。武州青梅より産するもの。

あをみどり　青綠（名）　藍の勝ちたる綠色。

あをみづら　（枕）　依綱（地名）に掛かる枕詞。（萬葉）

あをみなづき　青水無月（名）　水無月に同じ。○夫木「あかれさすあをみなづきの日をいたみ扇の手風ぬるくもあるかな」

あをし　襖子（名）　襖に同じ。

あをし　青（形。形狀言ク活）　青色である。●綠色である。

あをじ　鷆貧（名）　鳥の名。秋冬の頃群がり飛ぶ青黑き小鳥。

あをじ　青磁（名）　青色の磁器。―せいじに同じ。（源氏）

あをしらつるばみ　青白橡（名）　染色の名。―山鳩色に同じ。

あをひとくさ　青人草（名）　全國の人民を草に喩へてい

あをびる　ふ。●たみくさ。●蒼生。

（自動下二段）　青く爲る。○宇治「色あさましう青びれたるものどもの」

あをべうし　青表紙（名）　〔一〕青色の本の表紙。〔二〕青表紙を附けたる本。●漢籍。

あをひえ　竹刀（名）　古へ臍の緒を切るに用ひし具。竹にて造りたるもの。（和名抄）

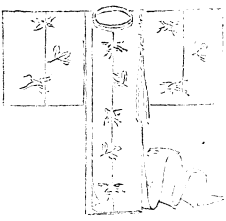
あをもち　青餅（名）　食品の名。草餅の一名。

あをもの　青物（名）　生又は煮て食用とすべき總べての植物。●野菜。●八百屋物。

あをもみぢ　青紅葉（名）　〔一〕紅葉せぬ楓の葉。〔二〕重の色目の名。表萌黄、裏黄などの類。

あをせん　青錢（名）　錢の名。寛永通寶の一。現今二厘に通用するもの。

あをずり　青摺（名）　〔一〕白地の布に藍色の模樣を摺る事。又は其摺りたる衣。〔二〕張りたる白布に山藍もて春草、小鳥など摺りて作りたる衣。神事の裝束に用ふるもの。小忌も之に屬す。〔圖〕



あわ　泡、沫（名）　空氣を含みたる水の玉。

あわ　泡（名）　泡緒の略。

あはつ　粟（名）　五穀の一つ。飯に炊き又は餅として食ふもの。

あはつ　淡（名）　淡き事。●淡泊。●冷淡。

（名）　あれば。●彼は。……歌には多く淡又は國の名の阿波などの意に掛けてよむ。○大和「濱千鳥飛び行く限りありければ雲立つ山をあはとこそ見れ」源氏「あはと見る淡路の島のあはれさへ淡くまなくすめる夜の月」

あはひ　間（名）　〔一〕あひだ。●ひま。●すきま。〔二〕色の配合。●衣服などの色の重なり。〔三〕交情。●なか。●夫婦の縁。

あはついひ　粟飯（名）　粟を炊きたる飯。

あはつぼ　粟穗（名）　粟の穗。

あはつむすび　淡路結（名）　あはびむすびに同じ。

あわを　泡緒（名）　あわびむすびに同じ。（萬葉）

あはつおこし　（名）　菓子の種。おこし米の一種。粟を以て製したるもの。

あはた 髕(名) 膝骨。(和名抄)

あわたたし (形。形狀言シク活) あわてらるゝ有樣。

あわだつ 泡立(自動四段) 泡の立つ。●泡の如きものゝ立つ。

あはだつ 粟立(自動四段) 皮膚に粟粒の如きもの〻生ずる。●甚しき寒さを感ずる。●甚しき恐を感ずる。

あはたやき (自動四段) 雲の重なり立つ。(古今)

粟田燒(名) 陶器の一種。京都粟田口より產するもの。

あはれ (名) 〔一〕すべてあはれといふ感じ。●感情。○「物のあはれを知る」〔二〕特には哀しき感情。……△(形)—あはれなる。(副)—あはれに。

あはれ (感) 喜怒哀樂の情ともすべて深く感ずる時の聲。●あゝ。

あはれがる 憐(他動四段) 〔一〕あはれに思ふ。●なさけをかくる。●同情を表する。〔二〕面白しと思ふ。●愛する。

あはれぶ 憐(他動四段) あはれむに同じ。

あはれさ (名) あはれなる事。

あはれみ 憐(名) 憐れむ事。●憐れむ心。●なさけ。

あはれし (形。形狀言シク活) あはれである。○堀川「あはれしや野燒にもれし峰のわの村草がくれきゞす鳴くなり」

あはそかに (副) 淡々しく。●輕卒に。○大鏡「あはそかに申すべきにあらず」

あわつ (自動下二段) 不意の出來事に遭ひて度を失ふ。●周章する。●狼狽する。●うろたゆる。●まごつく。

あはつか 淡々しき有樣。●冷淡。●輕卒。(形)あはつかなる。(副)—あはつかに。(雅)

あはつけし (形。形狀言シク活) あはくに同じ。

あはつけびと (名) 物に感情の薄き人。●冷淡なる人。(源氏)

あはむ 淺(他動下二段) 蹴んとする。●けなす。●冷遇する。●蔑視する。(雅)

あはうみ 淡海(名) みづうみ。●湖水。

あはく (自動下二段) 不整頓である。●打ち亂れて居る。(盛衰)

あはや (感) 危き時などに發する聲。○「あはや討たれぬと見るほどに」

あはッふ 粟生(名) 粟の生ねたる所。◆粟畑。

あわてふためく (自動四段) あわて騒ぐ。

あはッあはッし 淡淡(形。形狀言シク活) 淡し。◆淡泊なる。◆冷淡なる。◆輕卒なる。

あわあわし (形。形狀言シク活) あわたゝしに同じ。(雅)

あわさく 泡咲(自動四段) 泡の立つ。(記)

あはッざけ 粟酒(名) 粟にて造れる酒。粟盛の類。(著聞)

あはッぎ 檀(名) 木の名。檀の一名。(和名抄)

あわゆき 泡雪(和) 泡の如き雪。◆雪。

あはゆき 淡雪(名) 消ねやすき雪。◆春になりて降る雪。

あはッし 淡(形。形狀言ク活) 薄し。◆淡泊なる。◆冷淡なる。

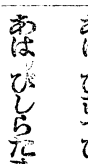
あわしほ 泡鹽(名) 鹽の一種。(和名抄)

あはッしがき (名) 澁を抜きたる柿。

あはッび 鮑。鰒(名) 貝の名。殼は厚くして壹なく。其裏面には美しき七色の光を有するもの。雄の肉は青く雌の肉は赤く共に美味なり。

あはッびだま 鰒玉(名) 鰒の中にある玉。眞珠。

あはッびむすび 鮑結(名) 紐の結び方の名。(圖)



あはッびしらたま 鰒白玉(名) 鰒の中にある玉。眞珠。

あはッもち 粟餅(名) 餅の一種。粟にて造りたるもの。

あはッもり 粟盛。泡盛(名) 粟にて製したる酒の名。燒酎の一種。琉球の名産。

あはッせ 袷(名) 衣類の名。表と裏と合はせて縫ひたるもの。◆袷衣。

あはッせ 菜(名) 飯のさい。◆おかず。

あはッせど 合砥(名) 砥石の一種。剃刀など研ぐに用ふるもの。

あはッせかりぎぬ 袷狩衣(名) 裏附の狩衣。

あはッせかがみ 合鏡(名) 二面の鏡を双方より照らし合はせて見る事。髮の後姿など見るに用ふ。

あはッせたきもの 合薰物(名) 香の一種。種々の香料を練り合はせるもの。

あはッせて (副) 丁度其場合に。◆同時に。○源氏「御几帳の帷子を一重打ちかけ給ふに合はせてさと光るもの脂燭をさし出でたるかとあきれたり」

あはせもの　菜物(名)　飯のさい。●おかず。
あはす　逢(自動四段)　逢はしむる。
あはす　合(他動四段)　〔一〕合はしむる。●一つにする。●調合する。〔二〕組む。●組み合はす。●將負させる。〔三〕占など當てる。

あか　垢(名)　人の皮膚に着きたる埃。
あか　赤(名)　色の名。五色の一つ。炭火の如き色。
あか　閼伽(名)　佛に奉る水。○天本「朝なく〳〵あかの水汲み樒摘み苔の袂は岩にふれつゝ」
あか　(名)　船の中に洩れ入る水。
あが　(代)　わがに同じ。○「あが大若」
あかね　赤猪(名)　獸の名。猪の赤きもの。
あかね　閼伽井(名)　閼伽の水を汲む井戸。
あがひ　瀆(名)　あがなひに同じ。
あかいひ　赤飯(名)　せきはん。●小豆飯。●あかのめし。●あかめし。
あかいろ　赤色(名)　赤き色。
あかいとおどし　赤糸縅(名)　緋縅に同じ。
あかは　明衣(名)　天皇着御の湯帷子。
あかはごり　明衣(名)　大嘗會の祭服の名。
あかはぢ　赤耻(名)　むきだしの耻。

あかはた　赤旗(名)　〔一〕赤色の軍旗。〔二〕平氏の旗。
あかはだ　赤肌(名)　赤裸。
あかはだか　赤裸(名)　すっぱだか。●丸裸。●裸體。
あかばな　赤花(名)　紅の花の一名。
あかばむ　(自動四段)　あからむ。●赤くなる。●あかみがつく。
あかはじ　赤櫨(名)　衣の重の色目の名。表赤黄色、裏萌黄。
あかに　赤土(名)　赤色の土。
あかにのほに　赤丹穂に(副)　健康にして顔の赤き有樣。●酒に醉ひて顔の赤き有樣。(祝詞式)
あがほとけ　吾佛(名)　〔一〕吾信仰する佛。〔二〕吾心にて尊く大切なりと思ふものを呼ぶ詞。○源氏「あが佛京に出で給はゞ」
あかほん　赤本(名)　草雙紙の異名。(多く赤紙に赤色を用ひし故に云ふ。
あかぼし　明星(名)　〔一〕金星の古名。●みゃうじゃう。〔二〕神樂歌の曲名。
あかとり　赤鳥(名)　古代童女の裝束。汗衫衣の一名。
あかとりぞめ　赤取染(名)　赤色に細筋を押寄せて絞り染めにする事。又は其物。○著聞「あかとり

あかとき 曉(名) あかつきの古言。(萬葉)

あかときつゆ 曉露(名) 曉に置く露。(萬葉)

あかぢ 赤地(名) 一面に赤色なる織物などの地。

あかり 明(名) 照らして物を見る爲めの光り。日光又は燈火。●光明。

あがりうま 跳馬(名) よく跳る馬。

あかりしやうじ 明障子(名) 明りを取るために紙を張りて作れる障子。即ち現今たゞ障子といふもの。◎昔は襖の事を障子といひたる故に此名あり。

あかる 明(形) 清く美しき。○視詞式「明和幣照和幣」

あかる 明(自動四段) 明るくなる。●明らかになつて來る。

あかる 赤(自動四段) 赤くなる。

あがる 上(自動四段) 〔一〕上へ行く。●高くなる。●のぼる。●昇進する。●上達する。〔二〕成就する。●出來上がる。●終になる。●濟む。〔三〕古の方に近くある。○「あがれる世」〔四〕參上する。

あがる 上(他動四段) 食し給ふ。●めしあがる。

あがる (自動四段) 馬の跳れ狂ふ。

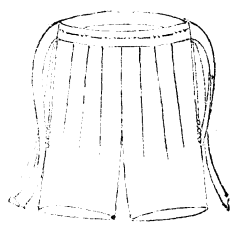
あがる 分(自動下二段) わかる。●散する。(雅)

あかるし 明(形。形狀言ク活) あきらかである。

あかおどし 赤縅(名) 赤糸縅に同じ。

あかおほくち 赤大口(名) 束帶の時表袴の下に着る袴。生の平絹を紅に染めて用ふ。但し宿老の人は白色の絹にて作る事あり。〔圖〕

あかをけ 閼伽桶(名) 閼伽の水を汲み入る〻手桶。



あかがひ 赤貝(名) 貝の名。殼ほ黑色にして肉の赤きもの。食用とす。

あかがり 輝(名) あかぎれに同じ。

あかかは 赤革(名) 赤く染めたゝなめし革。

あかかはおどし 赤革縅(名) 鎧の縅の名。赤革にて作りたるもの。

あかかがち 赤酸醬(名) 草の名。ほほづきの古名。(記)

あかがね 銅(名) 金屬の名。赤色のもの。

あかがねいろ 銅色(名) 銅の如き色。

あかかげ 赤鹿毛(名) 馬の毛色の名。鹿毛の赤みを帶びたるもの。

あかがさ 赤瘡(名) 病の名。麻疹。

あかがしら 赤頭(名) 能裝束の一つ。赤き毛の如く作りて兎などの頭に被るもの。

あかかすげ 赤糟毛(名) 馬の毛色の名。糟毛の赤みを帶びたるもの。

あかよぼろ 赤丁(名) 赤仕丁に同じ。

あがた 縣(名) (一)皇室の御領地。(二)京都以外の地方。●田舍。

あかだひィ 赤鯛(名) 魚の名。鯛の中最も赤くして麗はしく最も貴重せらるゝもの。

あがたぬし 縣主(名) 上古の官名。縣を治むる役。國造の配下に屬す。

あかだな 閼伽棚(名) 佛に供ふる水、花など取り扱ふ棚。僧家にあり。

あかだま 赤玉(名) 赤の玉。

あがためし 縣召(名) 縣召の除目を見よ。

あがためしのぢもく 縣召除目(名) 中古毎年正月十一日に行れたる地方官の叙任式。

あがれ (名) (一)分れ。●退散。(二)流。●其一流。●一族。(源氏)

あかつ 頒(他動四段) 分つに同じ。(雄)

あかつき 曉(名) 夜の明けんとする時。●明方。

あかつき 閼伽坏(名) 佛に供ふる水を盛る器。

あかつき 垢附(名) 垢の附きたる衣。……貴人の衣を拜領する時に云ふ。○「御垢附一枚」

あかつきおき 曉起(名) 曉に起くる事。●早起。

あかつきげ 赤月毛(名) 馬の毛色の名。月毛の赤みを帶びたるもの。

あかね 茜(名) (一)蔓草の名。根を叩き碎きて染料にするもの。(二)染色の名。茜にて染めたるもの。黑ずみたる赤色。

あかねさす 茜刺(枕) (一)日、晝などの枕詞。茜色のさす日の意。(二)紫の枕詞。茜色を帶びたるの意。

あがなひィ 贖(名) あがなふ事。又は贖のために出す品物。

あがなひィぬし 贖主(名) 人間の罪を贖ふために命を捧げて死したる耶蘇基督。(基督教)

あがなふ 贖(他動四段) (一)品物又は身體を出だして

あかなく

罪又は過失の償ひを爲す。〔二〕買ふ。

（自動）　飽かぬの延音。○伊勢「あかなくにまだきも月のかくるゝか山の端にげて入れずもあらなん」

あから　（形）　赤色の。

あからをとめ　（名）　顏の赤く美くしき少女。（記）

からをぶね　（名）　赤く塗りたる舟。（萬葉）

あからか　赤き有樣。△（形）—あからかなる。（副）—あからかに。

あからがほ　（名）　赤みを帶びたる顏。

あからがしは　赤柏（名）　紅葉したる柏。（萬葉）

あからたちばな　赤橘（名）　熟して赤らみたる橘の實。（萬葉）

あからむ　赤（自動四段）　赤くなる。

あからむ　赤（他動下二段）　赤くする。

あからふ　（他動下二段）　物を見て心を晴らす。＝あきらむに同じ。（續紀宣命）

あからけし　（形。形狀言ク活）　赤くある。

あからぶ　（自動四段）　あからむに同じ。

あからさま　自地（名）　〔一〕假初。●俄。△（形）—あからさまなる。（副）—あからさまに。○著聞「あからさまにも跡なき事はすまじきなり」風雅「仁和寺よりあからさまに京へ御幸ありて」〔二〕あらば。●明白。△（形）—あからさまなる。（副）—あからさまに。

あからめ　（名）　見て居る目を他へ向くる事。●よそ見。●脇見。

あからしまかせ　暴風（名）　早手。●暴風。●颶風。

あからひく　（自動四段）　赤く美しく光る。○萬葉「あからひく敷妙の子をしば見れば人妻ゆゑに我こひぬべし」

あかむ　赤（自動四段）　赤くなる。

あかむ　赤（他動下二段）　赤くする。

あがむ　贖（他動四段）　あがなふに同じ。（古）

あがむ　崇（他動下二段）　尊び敬ふ。●尊崇する。●崇敬する。●崇拜する。

あかんもの　贖物（名）　〔一〕罪人より沒收する贖罪品。〔二〕祓の時に出だす解除品。●はらへつもの。

あかんもののつかさ　贖司（名）　刑部省に屬して罪人より沒取せし贖罪品など管する役所。

あがふ　贖（他動四段）　あがなふに同じ。（萬葉）

あかのはな 閼伽の花(名) 閼伽の水に活けて佛に供へたる花。(源氏)

あかのぐ 閼伽具(名) 閼伽を汲み入るゝ道具。閼伽桶の類。

あかのめし 赤飯(名) 小豆飯。●せきはん。

あがく 足掻(自動四段) 〔一〕馬の前足にて地を掻く。〔二〕もがく。

あかくちば 赤朽葉(名) 染色の名。朽葉の赤みを帶びたるもの。

あかくちなし 赤梔(名) 染色の名。梔の赤みを帶びたるもの。

あかくりげ 赤栗毛(名) 馬の毛色の名。栗色の赤みを帶びたるもの。

あかぐま 赤熊(名) 獸の名。熊の一種。毛色赤黑くして性質頗に猛惡なるもの。

あかまつをり 赤松折(名) 折烏帽子の一種。〔圖〕

あかげ 赤毛(名) 馬の毛色の名。赤みがゞりたる色。

あかげひばり 赤毛雲雀(名) 馬の毛色の名。雲雀色の赤みを帶びたるもの。

あかぶくろ 赤袋(名) 香を入るゝ袋。●赤袋。

あかご 赤子(名) 生れ立ての小兒。●緑子。●嬰兒。●あかんぼ。

あかゑ 赤蟲(名) 陶器に燒き付けたる赤色の繪。

あかえひゝ 赤鱆(名) 魚の名。えひの一種にして色の赤きもの。

あかゑんば (名) 虫の名。赤色の蜻蛉。(和名抄)

あかあかと 明々と(副) あかるく。●あきらかに。

あかあしげ 赤葦毛(名) 馬の毛色の名。葦毛の赤みを帶びたるもの。

あかざ 藜(名) 草の名。葉は紫蘇に似て綠色の中に赤みを帶び秋細かき花咲くもの。若葉は羹として食し。莖は杖などに作る。

あかぎ 赤木(名) 〔一〕屑の赤色なる木材。〔二〕皮を剝ぎたる木。……黑木に對して。○源氏「よしある黑木赤木の笹を結ひまぜつゝ」

あがき 足掻(名) あがく事。●馬の歩み。

あかぎぬ 赤衣(名) 〔一〕緋色の袍。五位の着するもの。……裏も表も同色を用ふるものなれば萬葉には「赤色の一裏衣」などもよみたり。〔二〕退紅。

あかきおもの 赤御物(名) 小豆粥。(雅)

あかぎれ 皸(名) 寒氣に觸れて手足の皮の裂け割るゝ事。

あかめ 赤玄(名) 鯛の古名。(紀)

あかみづ 閼伽水(名) あかに同じ。○万代「年經たる深山がくれの木のもとに幾結びしつ谷のあか水」

あかし 明(名) 〔一〕證據。〔二〕燈火。

あかし 明(形。形狀言ク活) あかるし。●明らかなる。

あかし 赤(形。形狀言ク活) 〔一〕赤色である。〔二〕心の潔白である。○「赤き心」

あかじちゃう 赤仕丁(名) 退紅(たいこう)を着たる仕丁。

あかしらつるばみ 赤白橡(名) 染色の名。白橡の赤みを帶びたるもの。

あかしぶみ (名) 證文。●證書。

あかしびと (名) 〔一〕證人。〔二〕殉教者。(基督教)

あかひる 明晝(名) 晝間。●白晝。

あかびつ 明幅(名) 神事に用ふる清淨の櫃。

あかひも 赤紐(名) 小忌(をみ)を着る時右の肩に懸くる赤色の紐。一丈四五尺の帛を三筋組み合はせたるを二つに折りて用ふ。……小忌衣(をみごろも)の圖を見よ。

あかも 赤裳(名) 〔一〕赤色の裳。〔二〕赤き衣の裾。(歌詞)

あかもがさ 赤瘡瘡(名) 病の名。麻疹。

あがものあかす 贖物(名) あかむものに同じ。

明(他動四段) 〔一〕明らかにする。●顯はす。〔二〕證する。〔三〕夜を明けさする。

飽(他動下二段) 飽かしむる。

あかす 搖(自動四段) うごく。●あゆぐ。●動搖する。

あよぐ (古)

あた 仇。讎。寇(名) 我に害を與ふる事。又は其人。●かたき。●敵。……世人誤りてあだと濁音に唱ふるあり。

あた 咫(名) 上古尺度の名。掌の幅の長さ。後世は四寸と定む。

あだ 仇(名) 〔一〕變化し易き事。●移り易き事。●かりそめ。〔二〕色めきたる事。●うはきらしき事。〔三〕いたづら。●むだ……。△(形)—あだなる。(副)—あだに。

あたひ 價(名) 〔一〕直段。●直打。●價額。〔二〕價の金錢。

あだばな 仇花(名) 實を結ばずに花のみ咲く事。●むだ花。○「武士に二言なし茄子に仇花咲かず」

あたり 當(名) 〔一〕當る事。〔二〕あて。●目當。●けんとう。〔三〕意趣返し。

あたり (名) 〔一〕はとり。●近所。●近邊。〔二〕頃。

あたりまへェ 當前(名) 〔一〕理の當然。〔二〕普通。●通例。△(形)—あたりまへの。(副)—あたりまへに。(俗)

あたりあたり (名) そこら近處。●彼此の處々。

あたる 當(自動四段) 〔一〕觸る〻。●さはる。〔二〕目的の處に觸る〻。●目指したる處に行く。●思ふ通になる。〔三〕意趣を返す。〔四〕其毒に觸れて害を受くる。○「水にあたる」

あたはッす (自動四段) 男女交接する。(古)

あたがたき 仇敵(名) あた。●かたき。

あたかも 恰(副) 丁度。●さながら。

あたたか 暖ッ溫(名) 寒からず暑からざる度合。●春秋の陽氣に似たる感じ。△(形)—あたゝかなる。(副)—あたゝかに。

あたたかし 暖。溫(形。形狀言ク活) あたゝかである。●ぬくし。●ぬるし。

あだたらまゆみ 安太多良眞弓(名) 弓の名。上古陸奥より產せしもの。(萬葉)

あたたむ 暖(他動下二段) 暖かにする。●ぬくめる。

あたたまる 暖(自動四段) 暖かになる。●溫度の高まる。

あたたけし 暖(形。形狀言ク活) あたたかしに同じ。

あたね (名) 草の名。茜の古名。(記)

あたね 仇寐(名) 女に逢はずして獨り寐る事。(六帖)

あだな 仇名(名) 浮氣の評判。

あたなゝふッ (自動四段) あたすに同じ。

あだなみ 仇浪(名) 表面のみに立つ波。人心の浮き浮きしたる喩へ。(雅)

あたら (感) 惜しむ餘りに出づる聲。●あゝ惜むべし。○後撰「あたら夜の月と花とを同じくは心知れらん人に見せばや」

あたらあたらに (副) 新しくなりつゝ。○萬葉「年月はあたらく〳〵にあひ見れどあがもふ君はあきたらぬかも」

あたらし 新(形。形狀言シク活) あらたなる。●古からざる。

あたらし 可惜(形。形狀言シク活) 惜しむべし。●惜し。(雅)

あたらしむ (他動四段) 惜しと思ふ。●惜しむ。(雅)

あたらしきごし 新年(名) 〔一〕しんねん。●年始。〔二〕催馬樂の曲名。

あたむ (他動四段) 寇する。●敵たふ。○萬葉「あたみたる虎か吼ゆると」

あたトふ 能(自動四段) 力にて爲し得る。●堪ふる。●叶ふ。

あたトふ 與(他動下二段) 人にやる。●くる〻。●授くる。●贈くる。●遣はす。●付與する。

あだトふ (自動下二段) あざる〻。●戯る〻。●ふざける。●滑稽いふ。○狹衣「丸が顏はこよなくよきぞ見給へ〳〵とあだへて」

あたうち 仇討(名) 仇を討つ事。●敵討。●復讐。

あたのかぜ 敵風(名) 船に吹く難風。(空穗)

あだく (自動下二段) あだ〳〵しくある。●うはくする。●色めく。●じゃらつく。

あだくらべ 仇競(名) 浮氣の競爭。(伊勢)

あだや 仇矢(名) 的を外れたる矢。

あたま 頭。天窓(名) 〔一〕かしら。●くび。●いたゞき。〔二〕人。○「あたまかず」「大あたま」

あたまる (自動下二段) 敵とれらはる〻。●敵たまはる〻。(雅)

あたまわり 頭割(名) 入貫など人數に割り當つる事。●分頭。

あたまかず 頭數(名) 人數。

あたまもる 仇守(名) 外冠を守り防ぐの意にて筑紫の形容詞に用ふ。(萬葉)

あだげ (名) あだ〳〵しき樣子。●うはきらしき事。

あだぶし 仇伏(名) あだれに同じ。(夫木)

あだごと 仇事(名) 浮氣の事。●色めかしき事。●色事。(雅)

あだごころ 仇心(名) 浮きたる心。●うはき。

あたへ 直(名) 姓(かばね)の一つ。

あだあだし (形。形狀言シク活) うはきらし。●色めきたる。●じゃらつきたる。

あたゆまひ 仇忌(名) 仇として忌み惡む事。●敵視する事。

あだめく (自動四段) あだ〳〵しく見ゆる。●浮氣らしくある。

あだし (形) 〔一〕他の。●外の。●異なる。○六帖「櫻

よりまさる草なき春なればあだし草葉を物とやは見る」〔二〕假の。◉あてにならぬ。

あだしよ (名) 假の世。◉無常なる世。

あだしの (名) 〔一〕死人を燒き又は葬る野邊。〔二〕特には京都の鳥邊部。東山にあり。

あたじけなし (形。形狀言ク活) しはい。◉けちな。◉吝嗇な。(俗)

あだびと 仇人(名) 浮氣もの。

あだもの 仇物(名) 〔一〕仇なる物。◉たのみにならぬもの。◉假のもの。(羅)〔二〕浮氣もの。

あたす 寇(自動サ變) 仇を爲す。◉敵たふ。◉害を與ふる。

あれ 荒(名) 暴風雨。◉しけ。◉あらし。○「二百十日のあれ」

あれ (名) 四月中の午の日神事の稱。……みあれを見よ。○貫之集「あれひきに引きつれてこそ千早振加茂の川波うち渡りつれ」

あれ 彼(代) あのもの。◉かれ。

あれ 吾(代) 我。(古)

あれをとこ 阿禮男(名) 加茂の御あれに齋主を勤むる神官。(朝野群載)

あれをとめ 阿禮少女(名) 加茂の御あれに奉仕し給ふ齋院。(三代實錄宣命)

あれはたれどき (名) あれは誰ぞと問ひ合ふ程に暗くなりたる時。◉かはたれどき。◉夕暮。◉薄暮。(源氏)

あれた 荒田(名) 耕作せぬ田地。

あれつぐ 生繼(他動四段) 生れて前の人の跡を繼ぐ。(萬葉)

あれます 生座(自動四段) 生れ給ふ。(萬葉)

あそ 朝臣(名) あそみの略。人を敬愛して呼ぶ詞。○紀「たまきはる內のあそ。汝こそは世の遠人」

あそばかす 遊(他動四段) 遊ばしむる。

あそばす 遊(他動四段) 〔一〕遊ばしむる。〔二〕爲し給ふ。◉行ひ給ふ。

あそばす 遊(助動四段) 敬語に用ふ。○「お出遊ばせ」

あそそに (副) うす〳〵。◉少々。(萬葉)

あそん 朝臣(名) あそみの音便。◎人を敬愛して呼ぶ詞。○源氏「其姉君はあそんのおとうとや持たる」

あそぶ 遊(自動四段) 〔一〕心身を慰むる事をする。

〔二〕勉めず勞せずして居る。●ひまで居る。〔三〕音樂をする。〔四〕旅行する。〔五〕學問修業に行く。●入學する。

あそぶいと 遊糸(名) いとゆふ。●いうし。●かげろふ。(歌詞)

あそこ 彼處(代) あの處。●あしこ。●かしこ。

あそみ 朝臣(名) 姓(かばね)の一つ。

あそび 遊(名) 〔一〕遊ぶ事。●遊戯。●遊山。●なぐさみ。〔二〕音樂。●管絃。〔三〕遊女。〔四〕遊興。●放蕩。

あそびを 遊男(名) 樂人。●伶人。

あそびわざ 遊業(名) 遊戯。

あそびがたき 遊敵(名) 遊びの相手。●遊び仲間。

あそびぐさ 遊草(名) 遊びの種。●遊びの材料。(源氏)

あそびめ 遊女(名) いうぢょ。●うかれめ。●娼妓。

あそびもの 遊物(名) 〔一〕遊戯の道具。●玩弄物。〔二〕遊女。

あつ 當(他動下二段) あたらしむる。

あついた 厚板(名) 〔一〕絹織物の名。練糸を縦とし生糸を横として厚く織りたるもの。〔二〕能裝束の一つ。厚板にて作れる武士などの衣服。

あっぱれ 天晴(感) 褒むる時の聲。○「あっぱれ出かした」△(形)—あっぱれの。

あっと (副) 感心する聲。●褒むる聲。

あったうち 壓倒(名) 壓し倒す事。△(動)—壓倒す。

あづち 彼方(代) あの方。●あち。●あちら。●かなた。射場(名) 射術を學ぶため的を懸くる所。土にて築きたる厚き塀。●あむづち。●いくはごころ。(圖)

あづちもん 安土門(名) 門の一種。築地造りの門。

あつりょく 壓力(名) 壓し付くる力。

あつる 暑(自動下二段) 暑氣に苦しむ。(雅)

あつか 敷束草(名) 青草を束ねて作れる敷物。神事などの用品。(延喜式)

あつかひィ 扱(名) 〔一〕扱ふ事。〔二〕扱ふ方。●處分。●待遇。〔三〕中裁。

あつかひィぐさ 扱草(名) 〔一〕持ち扱ふ種。〔二〕評判の種。○狹衣「此頃のあつかひぐさにこそ言ひのゝしりけれ」

あづかり 預(名) 〔一〕預かる事。〔二〕受持。●擔任。●擔當。〔三〕擔當の役人。〔四〕猶豫。●中

あつがる
あづかる
あづかる
あつかはし

止。

暑(自動四段)　暑く感ずる。

與(自動四段)　其事に關係する。●相談を受くる。

預(他動四段)　他の物を我方に置きて保護する。

扱(形。形狀言シク活)　〔一〕持て扱ひたし。●出て世話が燒きたい。○源氏「杓木にはなしはてずもがなと人知れずあつかはしう思し侍れど」〔二〕わづらはし。○源氏「いとあまりあつかはしう御もてなしなり」

あつかはし

暑(形。形狀言シク活)　暑し。●あつくるし。(雅)

あつかふ

(自動四段)　熱にて惱む。●病氣になる。(古)

あつかふ

扱(他動四段)　〔一〕さりさばく。〔二〕持ちて使ふ。●あしらふ。●氣を配る。〔三〕もてあつかふ。●もてあます。

あつかまし

(形。形狀言シク活)　面の皮の厚き。●鐵面皮なる。

あつかもの

羹(名)　あつものに同じ。

あつえふ

厚葉。厚樣(名)　紙の名。厚き島の子紙。……薄葉に對して云ふ。

あつよく

壓抑(名)　抑へつくる事。●厭制。△(動)―壓抑す。

あつたちばな

(名)　あべたちばなを誤用せしもの。(新六帖)

あづなひ

(名)　合葬。(紀)

あつらふ

誂(他動下二段)　依頼する。●注文する。

あつむ

集(他動下二段)　集まらしむる。●つどへる。●寄する。●取纏むる。

あつうす

碾磑(名)　挽臼の古名。

あづく

預(他動下二段)　我物を他人に托して保護さする。

あつくるし

(形。形狀言シク活)　餘程暑い。●あつそうな。

あづま

東(名)　〔一〕關東。●東國。〔二〕特には鎌倉幕府。〔三〕あづまごとの略。

あづまど

東人(名)　關東人。●東國人。

あづまぢ

東路(名)　〔一〕京都より東國へ行く道路。又は其沿道の諸國。〔二〕風俗歌の曲名。

あつまり

集(名)　〔一〕群集。●集會。〔二〕基督教の道

あつまる

のためにする集會。

集(自動四段)　つどふ。●寄り合ふ。●群集する。●集合する。●集會する。

あつまをとこ　東男(名)　東國の男子。

あつまをとめ　東少女(名)　東國少女。

あつまをり　東折(名)　衣の褄を折り返して帶に挾む事の稱へ。

あつまをんな　東女(名)　東國の女子。

あつまわらはゥ　東孺(名)　內侍所に屬せる女官の名。行幸の時乘馬して供奉するもの。

あつまからげ　(名)　あつまをりに同じ。○新後拾遺「賤の女があつまからげの麻衣二また川はさゞ渡るらん」

あつまつ　(名)　田舍。(和名抄)

あつまむすび　東結(名)　紐の結び方の名。〈圖〉

あつまうた　東歌(名)　〔一〕東遊の歌曲。〔二〕關東の人の和歌。〔三〕特には萬葉集中に載せたる東國の和歌。

あつまや　四阿。東屋(名)　〔一〕四本柱に假初の屋根を附けたる家。〔二〕催馬樂の曲名。

あつままひ　東舞(名)　東遊の舞曲。

あつまげた　東下駄(名)　疊附の足駄。女の用ふるもの。

あつまごと　東琴(名)　東遊に用ふる琴。和琴の一名。

あつまこそで　東小袖(名)　小袖よりも一層小さく作れる袖。近古時代普通の衣服。

あつまあそび　東遊(名)　舞曲の名。雅樂の一種。神事に用ふるもの。

あつまぎぬ　東絹(名)　昔し東國より產せし一種の絹。

あつまめ　東女(名)　あづまをんな。(頼政集)

あつまびと　東人(名)　關東人。●東國人。

あつまひゃくッくゎん　東百官(名)　朝廷の百官に擬し武家にて私に設けたる官職の總名。

あつけ　暑氣(名)　〔一〕あつさ。●しょき。〔二〕夏氣ざはり。●中暑。

あつけし　暑(形。形狀言ク活)　あつしに同し。

あっぷく　壓服(名)　壓抑して服從さする事。△(動)ー壓服す。

あつごゆ　厚肥(自動下二段)　肉の厚く肥にてある。……紙の地などに云ふ。

あつあつと　厚々と(副)　厚き有樣。

あつさ　(名)　〔一〕木の名。上古弓に作りたるもの。……

其木は今の赤目柏なりとも雷電大角豆なりとも云へど詳ならず。〔二〕梓弓の略。〔三〕書物を彫刻する版木。○「梓に上す」

あづさゐ 紫陽花(名) あぢさゐの古名。

あっさり (副) うっすり。●淡泊に。(又)—あっさりと。

あづさゆみ 梓弓(名) 梓の木にて造りたる弓。

あづさゆみ 梓弓(枕) 引く本末春(張)音などの枕詞。皆弓に緣ある詞。(萬葉)

あづさみこ 梓巫(名) 梓弓を鳴らして神おろしを執行する巫。

あづき 小豆(名) 〔一〕小豆の一種。大豆に似て小粒なるもの。〔二〕染色の名。黑みある赤色。

あづきがゆ 小豆粥(名) 小豆を入れたる粥。世俗正月十五日に食ひて祝ふもの。

あづきぬ 厚絹(名) 織物の名。厚板の一名。

あづきめし 小豆飯(名) 小豆を入れて炊きたる飯。●赤飯。

あづきもち 小豆餅(名) 小豆製の餡を掛けたる餅。

あつゆ 熱湯(名) 煮え湯。●沸湯。

あつゆ (自動上二段) 病の危篤になる。○源氏「いとこのもしげなき樣に惱みあつい給へば」

あつし 厚(形。形狀言ク活) 〔一〕薄からぬ。〔二〕手重き。●丁寧な。

あつし 暑。熱(形。形狀言ク活) 溫度の最も高き。●火に觸れたる如き感じのする。●夏の土用中の如き感じのする。

あつし 篤(形。形狀言ク活) 病の危篤なる。

あつし (形。形狀言シク活) 〔一〕熱氣を持ちたる。〔二〕病氣がちである。●病身である。●惱ましい。……(雅)

あつびたひ 厚額(名) 冠の一種。磯を厚く造れるもの。

あつまうど 東人(名) 關東人。●東國人。

あつもの 羹(名) 食品の名。吸物の類。

あっせい 壓制(名) 人を壓し付けて自由を與へぬ事。△(動)—壓制す。

あっす 壓(他動サ變) 壓し付くる。

あね 姉(名) 同腹の女子にして其人より年長の女子。又は之に準じたるもの。

あねむこ 姉婿(名) 姉の夫。

あねむすめ 姉娘(名) 最も年長の娘。●長女。

あねご 姉御(名) 他人の姉の尊稱。

あねさまごと 姉樣事(名) 女兒の遊戲。紙にて造りた

る人形を以て大人生活の有樣を眞似ぶ遊び。

あな 穴(名) 〔一〕深く凹みたる所。又は向へ貫き通りたる口。〔二〕缺點。◎あち。

(感) あゝ。◎あら。◎あばれ。○「あな樂し」「あなをかし」

あない 案内(名) あんないに同じ。△(動)—案内す。

あないち 穴一(名) 遊戯の名。地に穴を穿ち錢を打ち込みて勝負を爭ふもの。

あないち 天名地鎭(名) 神代文字なりと言ひ傳ふる文字の一體。〈字體は卷首に示す〉

あなはじかみ (名) 野菜の名。生薑の古名。(和名抄)

あなにやし (句) あなはあゝ。には美し。やは感詞。しは助辭。◎あな美し。(記)

あなにゑや (句) あなにやしに同じ。(紀)

あなほぜりに (副) あながちに。◎强ひて。◎むりに。

あなぐり 侮(名) あなどる事。

あなどる 侮(他動四段) 見下ぐる。◎輕んずる。◎さげしむ。◎輕蔑する。

あなたトふッと 安名尋(名) 雅馬樂の曲名。

あなり (自動ラ變) 有るなりの畧。○源氏「世に久しからぬためしにもあなるを」

あなおと 足音(名) 歩く足の音。

あながち 强(副) 强て。◎無理に。◎むやみに。(又)—あながちに。

あなかんむり 穴冠(名) 漢字の冠の名。竈、窖、窟等の上にある穴の字の部分。

あなかしこ 穴賢(句) 〔一〕あゝ恐多し。◎あゝ勿體なし。〔二〕あゝ恐ろし。◎あゝ恐るべし。〔三〕消息文にては恐惶謹言の意。

あなた 彼方(代) 〔一〕あちらの方。◎あなた。◎向の方。〔二〕きみ。◎御身。◎おまへさま。

あなづり 侮(名) あなどりに同じ。(雅)

あなづるあなづらはッし 侮(他動四段) あなどるに同じ。(雅)

(形。形狀言シク活) 侮るべくある。◎見下げらるゝ。◎目下に見らるゝ。(雅)

あななひ 廊柱(名) 高き處に上る爲め丸木など組みて作りなる足掛。◎足場。

あなな〻ふッ (他動四段) 助くる。◎補助する。○三代實錄宣命「天下の政を相あなゝひ助け奉り」

あなうら 蹠(名) 足の裏。

あなぐり (名) あなぐる事。◎穿鑿。

あなぐる（他動四段）飽くまで探り求むる。●穿鑿する。

あなぐら　穴藏（名）地を堀りて土藏の代用に設けたる穴。

あなや（感）〔一〕あなとやと重れたる詞。驚の聲。〔二〕あなに同じ。……（雅）

あなご　穴子（名）魚の名。形は鱧に似て、味は鰻に似て稍や下れるもの。

あなゆむ　足懶（自動四段）足なやむ。●あるきわづらふ。（萬葉）

あなめ（句）あなはあ、めは目。◎目にて見るも痛はしの意。○袖中抄「秋風の吹くにつけてもあなめあなめ小野とはならじ薄おひけり」

あなみす　あなし（自動サ變）囂しく騷ぐ。（豐後風土記）

あなし（名）あなじに同じ。○新千載「吹き拂ふあなしの風に雲晴れてなごのさわたる有明の月」

あなじ（名）乾の方より吹く風。

あなひら　跗（名）足の甲。（和名抄）

あなすゑ　足末（名）〔一〕足の先。〔二〕子孫。……（雅）

あら（感）あな。●あ、○「あら面白や」

あらひ　洗（名）料理の詞。刺身を冷水にて洗ひたるもの。

あらひがみ　洗ひたる髪の毛。

あらひよね　洗米（名）洗ひ清めたる白米。神に奉るもの。

あらいそ　荒磯（名）涙の強く打寄する磯。

あらひぎぬ　洗衣（名）洗濯したる衣類。

あらいみ　荒忌（名）散齋（さんさい）を見よ。

あらにぎのはらへ　荒和祓（名）水無月祓の一名。◎荒妙和妙の御衣を神に奉る事ある故の名なるを、誤りて荒ぶる神を和す意にとりなして歌などによめり。

あらどこ　荒床（名）人死して葬儀を行ふまで棄せ置く床。●殯（あらき）の床。

あらなを　荒男（名）あらしをに同じ。

あられうぢ　荒療治（名）外科醫などのする手荒き療治の仕方。

あらぬ　荒野（名）荒き野。（萬葉）

あらぬ（形）意外の。●其他の。○徒然「今日は其事をなさんと思へど。あらぬいそぎまづ出で

來て紛れ暮し」

あらを 荒男(名) ますらを。●大丈夫。●勇士(万葉)

あらをだを 荒小田を(枕) かへすの枕詞。田を耕すの意。

あらはッ 顯(名) かくさぬ事。●むきだし。●公然。△(形)—あらはなる。(副)—あらはに。

あらはッに 現(名) 人間界すべての現象……幽冥界の幽事に對して。

あらはッに (副) 隱さずに。●公然と。●明白に。

あらはッにごと 現事(名) あらはにに同じ。

あらはッる 顯。現(自動下二段) 秘したる事の人に知るる。●露顯する。●明白になる。

あらはッかす (他動四段) あらはすに同じ。

あらはッふッ (名) 洗ふの延音。(雅)

あらはッしごろも 顯衣(名) 源氏物語に「此あらはしごろもの色なくば得こそ思ひ給へ分くまじかりけれとのたまへば」とあるより出でたる詞。此意は。玉葛は光源氏の子なりとのみ人は思ひつるに。實は致仕大臣の子なりしが。此頃大臣の母沒せしにより父君の祖母なるを以て玉葛喪服を着したり。光源氏の子ならば他人にて忌服の掛るまじき理なるにと始めて思はするやうに。此喪服が玉葛の素性を顯はしたるとなり。後世謠曲などには意味もなく唯衣といふ文字の縁にてあらはしぎぬなどの詞はしば〳〵用ひらる。

あらはッしぎぬ 顯衣(名) あらはしごろもに同じ。

あらはッす 顯。現(他動四段) (一)人に知らする。●公にする。●明白にする。(二)思想を示す。

あらはッす 著(他動四段) 書物を作る。●著作する。●著述する。

あらかべ 粗壁(名) 上塗を掛けぬ壁。

あらかはッ 洗革(名) 革の一種。薄紅にて染めたるもの。

あらかはッおごし 洗革紙の名。洗革にて作れるもの。

あらがね 荒金(名) (一)いまだ人工を加へざる鑛物。(二)鐵の古名。

あらがねの 荒金の(枕) 土の枕詞。荒金を堀り出す土の意。

あらかん 阿羅漢(名) 羅漢に同じ。(佛教)

あらがふッ (他動四段) 爭ふ。●競爭する。●抵抗する。

あらがき 荒垣(名) あら〳〵と透間ある垣。

あらがきの　荒垣の（枕）　よその枕詞。垣の外の意。（萬葉）

あらがきまゆみ　（名）　荒木の眞弓。（萬葉）

あらがみ　荒神（名）　荒々しく人に罰など與ふる神。

あらがみ　現神（名）　現人神に同じ。

あらかじめ　豫（副）　かねて。◉前以て。◉前より。

あらよ　荒世（名）　和世を見よ。

あらた　荒田（名）　〔一〕荒れたる田地。〔二〕風俗歌の曲名。

あらた　新　〔一〕あたらしき事。〔二〕靈驗の著るしき事。……（形）―新なる。（副）―新に。

あらたか　荒熊（名）　野に生ひ立ちたる若熊。

あらたか　神佛の靈驗の著るしき有樣。△（形）―あらたかなる。（副）―あらたかに。

あらたよ　新世（名）　新しき君が代。◉改新したる君が代。（萬葉）

あらだつ　荒立（自動四段）　荒くなる。

あらだつ　荒立（他動下二段）　荒立たする。◉事を大きくする。◉騷がす。

あらたむ　改（他動下二段）　〔一〕新にする。◉變へてよくする。〔二〕取調ぶる。◉檢査する。◉吟味する。◉點檢する。

あらたま　新玉。璞（名）　〔一〕未だ人工を加へて琢かぬ玉。〔二〕枕詞より誤解して世俗新年の意に用ふ。

あらたま　荒魂（名）　怒り荒ぶる時の魂。……溫和なる時の魂を和魂（にぎたま）といふに對して。

あらたまる　改（自動四段）　〔一〕新になる。◉變りてよくなる。〔二〕禮儀正しくなる。◉四角張る。◉威儀を正す。（俗）

あらたまの　新玉の（枕）　年月などの枕詞。（萬葉）

あらたへ　荒妙（名）　上古織物の一種。粗く織りたる布。◉布の總名。

あらたへの　荒妙の（枕）　藤の枕詞。藤の皮にて織りたる荒妙の意。○萬葉「荒妙の藤江の浦」同「荒妙の藤井が上」

あらため　改（名）　あらたむる事。◉檢査。◉點檢。◉調査。

あらたし　新（形。形狀言ヲ活）　新である。◉あたらし。◉新規なる。

あられ　霰（名）　〔一〕雨の冰りて降るもの。〔二〕霰地に同じ。

あられ 阿良禮(名) あらればしりに同じ。

あらればしり 阿良禮走(名) 女踏歌の一名。

あられぢ 霰地(名) 染摸樣の一種。一面に置きたる霰の如き小紋。袴袴などに用ふるもの。

あられふり 霰降(枕) 鹿島(地名)きしみが嶽(山の名)遠つ近江(今の遠江)などの枕詞。

あらそひ 爭(名) 爭論。●競爭。

あらそふ 爭(自動四段) 勝たんとして人に張り合ふ。●抵抗する。●競爭する。●爭論する。

あらぞめ 桃花染(名) 染色の名。薄紅。

あらづくり 荒作(名) 下拵。●あらこなし。

あらなは 荒繩(名) 藁の繩。

あらなみ 荒浪(名) 荒き浪。

あらか 荒々しき有樣。(形)―あらゝかなる。(副)―あらゝかに。

あららぎ (名) 塔をいふ。齋宮の忌詞。(延曆儀式帳)

あらむしろ 荒莚(名) 粗く編みたる莚。

あらむし。 荒武者(名) 勇猛なる武者。

あらう 荒鵜(名) 鵜飼の詞。始めておろして使ふ鵜。

あらふ 洗(他動四段) 水に浸して汚れを去る。●洗濯する。

あらうま 荒馬(名) 荒々しき馬。●荒れ易き馬。

あらうみ 荒海(名) 浪の荒き海。●大海。●外洋。

あらうみのさうじ 荒海障子(名) 禁中清涼殿にある障子の名。大海の樣を畫かれたるもの。

あらの 荒野(名) 荒き野原。●あれの。

あらく (自動下二段) 荒くなる。●荒るゝ。○土佐「今日海あらけ磯に雪降り」

あらく (自動下二段) 散る。●散り分るゝ。

あらくさ 荒草(名) 荒々しき雜草。

あらまほし (形。形狀言シク活) 有りたいと希望せらるゝ。●羨まるゝ。

あらまき 荒蒔(名) 苞。●叢苞。○宇治「鯛のあらまき」

あらまし 荒增(名) (一)大ふそ。●大略。●大概。(二)あらます事。●豫期。●豫想。

あらまし (形 形狀言シク活) 荒しに同じ。(雅)

あらます (他動四段) 豫期する。●豫想する。

あらけなし (形。形狀言ク活) 荒し。●荒々し。

あらぶ 荒(自動上二段) 荒くなる。●荒立つ。●亂暴する。

あらごも 荒薦(名) (一)新しき薦。(二)粗く編みたる

あらて 薦。

荒手(名) 新しき軍勢。……既に戰ひ疲れたる兵に對して。

あらてつがひィ 荒手結(名) てつがひを見よ。

あらあら 荒荒(副) あらまし。●大略。●大よそ。●ざっと。

あらあらし 荒荒(形。形狀言ク活) ひどく荒き有樣。

あらき 殯(名) 人死して後葬儀を行ふまでの間屍體を置くところ。○萬葉「あらきの宮」

あらき 荒木(名) 伐りたるまゝ未だ人工を加へざる木材。●皮の附きたるまゝの木。

あらぎゃうぎょう 荒行(名) 行者の行ふ荒々しき苦行。

あらゆる (形) 有りと有る限の。●あるたけの。

あらゆみ 荒弓(名) 新製の弓。

あらめ 荒布(名) 海草の名。和布に似て色巨赤黑く葉も厚きもの。古來食用又は肥料とし近年此草よりヨヂュームを製出す。

あらめおどし 荒目縅(名) 鎧の縅の名。糸目を荒くしたるもの。

あらみ 新身(名) 新しく鍛ひたる刀の身。

あらみち 荒道(名) 開け居らぬ道。

あらみたま 荒御魂(名) 荒魂の尊稱。

あらし 嵐(名) (一)吹き荒るゝ風。●暴風。(二)山より吹きおろす風。●山風。

あらし 荒。粗(形。形狀言ク活) (一)強し。●猛し。●穢雜ならず。●おとなしからず。(二)荒れてある。(三)細かならず。

あらしを 荒男(名) 荒き男。●猛夫。

あらしね 荒稻(名) 未だ糠を去らぬ米。

あらしまかぜ 荒嶋風(名) 荒き嶋の風。

あらひとがみ 現人神(名) (一)人間と現はれて出で來れる神。(二)天皇陛下。

あらもと 糧(名) 糒米の古名。(和名抄)

あらもの 荒物(名) 勝手用小道具の總名。箒、笊、竹皮草履などの類。

あらす 荒(他動四段) 荒れしむる。●穢す。●侵暴する。

あらず (副) いな。●いや!。……人の言語を受けて答ふる時に云ふ詞。

あむ 虻(名) 虫の名。あぶ。(三古)

あむ 編(他動四段) (一)打違へに組み合はせて物を造る。●簾、籠、網など造る。(二)書物など組

み立つる。◆編集する。

あむ　浴（他動四段。又上二段）　あびる。

あん　庵（名）　〔一〕いほり。◆草庵。〔二〕僧尼の住む小家。〔三〕尼の尊稱。○「お庵さま」

あん　餡（名）　小豆に砂糖を加へて作れるもの。餅の心に入れ又は外に掛けても食ふ。

あん　案（名）　〔一〕机。〔二〕考。〔三〕草案。◆下書。

あんば　鞍馬（名）　鞍置きたる馬。

あんばい　鹽梅（名）　〔一〕程よき加減。〔二〕加減。

あんに　暗に（副）　ひそかに。◆内々に。

あんど　安堵（副）　〔一〕住むべき土地に身を安んずる事。〔二〕其地に安堵せしめて將軍より所領を賜はる時の御教書。〔三〕安心。△（動）—安堵す。

あんどん　行燈（名）　木の骨に紙を張り中に油火を入れて室内を照らさする燈器。

あんどう　行燈（名）　あんどんに同じ。

あんどぶぎょう　安堵奉行（名）　武家の役名。將軍代がはりの時社寺の所領など改むる事を掌るもの。

あんち　安置（名）　安んじ置く事。◆崇め尊みて据ゑ置く事。△（動）—安置す。

あんをん　安穩（名）　安く穩なる事。◆安全。◆泰平。△（形）—安穩なる。（副）—安穩に。

あんが　晏駕（名）　天皇の崩御。

あんかん　安閑（名）　〔一〕安く閑かなる事。〔二〕手を空しくして時を費やす事。△（副）—安閑と。

あんやうじょうど　安養淨土（名）　淨土に同じ。（佛教）

あんだ　筵輿（名）　編み板の意。◎釣臺の類。昔し手負又は罪人などを乘せたるもの。

あんたい　安泰（名）　無事。◆壯健。◆安全。

あんそく　安息（名）　安心して休息する事。

あんそくにち　安息日（名）　〔一〕基督教にては日曜日。〔二〕猶太教にては土曜日。

あんそくかう　安息香（名）　〔一〕香料の名。〔二〕線香の名。安息香にて造りたるもの。

あむづち　射槌（名）　あづちに同じ。

あんねい　安寧（名）　安康。◆安全。◆安泰。

あんな　（形）　あの樣な。◆彼が如き。（俗）

あんない　案内（名）　〔一〕道しるべ。◆先導。〔二〕熟達。◆巧者。〔三〕招待。〔四〕人の家を訪ひて取

あんらく 安樂(名) 安心にて快樂多き事。(英)ものまう。(英)賴まう。(形)—安樂なる。(副)—安樂に。

あんぐ 暗愚(名) 暗く愚なる事。

あんくわ 行火(名) 置炬燵に似て輕便なるもの。(英)辻暖。

あんぐ。 安臥(名) 安心して寐轉ぶ事。△(動)—安臥す。

あんぐわい 案外(副) 思ひの外。(英)存外。(又)—案外に。(形)—案外なる。(又)—案外の。

あんぐう 行宮(名) 天皇の假の御所。(英)行在所。(英)離宮。

あんや 暗夜(名) 闇の夜。

あんま 按摩(名) (一)揉み療治。(二)按摩を業とする人。(英)按摩所。

あんまとり 按摩取(名) 揉療治を業とする人。(英)按摩。

あんぷく 按腹(名) 腹を揉み摩る事。(英)按摩。△(動)—按腹す。

あんご 安居(名) 夏を勤むる間、僧の籠り居る事。……げを見よ。

あんころもち 餡轉餅(名) 餅の一種。餡にて包みたる餅。

あんかう 鮟鱇(名) 魚の名。口と腹のみ大きくして形醜く。長き鬚の先に小さき虫の如き形したるものありて他の魚を誘ひ寄せ大なる口にて吸ひ込み食ふもの。

あんかう 安康(名) (一)天下の無事なる事。(英)泰平。(二)人身の無事なる事。(英)健康。

あんがう 暗號(名) 秘密の符牒。

あんがふ 暗合(名) 偶然の符合。△(動)—暗合す。

あんこく 闇黑(名) くらやみ。△(形)—闇黑なる。

あんでん 行殿(名) 行宮に同じ。

あんざ 安坐(名) 膝を組む事。(英)あぐらかく事。△(動)—安坐す。

あんざいしょ 行在所(名) 天皇の旅の御宿り。(英)假の御所。(英)行宮。

あんさつ 暗殺(名) 誰とも知らせずに人を殺す事。(英)闇討。△(動)—暗殺す。

あんざん 暗算(名) 胸勘定。(英)胸算。

あんざん 安産(名) 安く産をする事。

あんき 安危(名) 安き事と危き事と。

あんき 諳記(名) そらんじ覺ゆる事。△(動)—諳記す。

あんき 安氣(名) 心の安き事。(英)平氣。(英)安心。(英)のんき。△(形)—安氣な。(俗)

あんぎゃ 行脚(名) 修業のため僧の諸國を旅しあるく事。

あんみん 安眠(名) 安心して眠る事。●安寐。●安臥。●高枕。△(動)—安眠す。

あんじ 案(名) 〔一〕考へ。工夫。〔二〕心配。

あむしろ 網代(名) あじろに同じ。

あんしょう 暗誦(名) そらんじ讀む事。△(動)—暗誦す。

あんせうしょう 暗礁(名) 海の底にありて水面に顯はれぬ岩石。

あんしつ 暗室(名) 太陽の光線を遮りて暗くしたる部屋。

あんしつ 庵室(名) 僧尼の住む小家。●あん。

あんしん 安心(名) 心を安んずる事。●安堵。△(形)安心なる。(副)—安心に。(動)—安心す。

あんじゅ 案主(名) 武家にて記錄を司る役。

あんしゅれい 按手禮(名) 基督教會の教職となる時に行ふ禮。先任の教職手を其頭上に置きて祝するの式。

あんぴ 安否(名) 平安なりや否やの意。◎動靜。●機嫌。

あんもん 案文(名) 證書などの文章の下書。

あんぜん 安全(名) 無事平安なる事。●安穩。●健康。△(形)—安全なる。(副)—安全に。

あむす 浴(他動四段。又下二段) あびさする。●あびせる。

あんず 杏子(名) 木の名。梅に似て實赤く甘味なるもの。

あんず 案(他動サ變) 〔一〕考ふる。●工夫を運らす。〔二〕心配する。●憂慮する。

あかふ 合(自動四段) 〔一〕物と物と一つになる。〔二〕あてはまる。〔三〕一致する。

あかふ 逢(自動四段) 〔一〕對面する。〔二〕でくはす。〔三〕男女相戀る。〔四〕結婚する。

あかふ 饗(他動下二段) 饗應する。(雅)

あかふ 和(他動下二段) 〔一〕搔きまぜる。〔二〕和物を作る。

あかふ (自動下二段) 堪へる。●こたへる。●強ひてする。●古今「秋風にあへず散りぬるもみち葉のゆくへ定めぬ我ぞかなしき」

あうら 足占(名) あしうらに同じ。

あうん 阿吽(名) 出づる息と入る息とに發するあ音とうん音との二つ。眞言宗などにては初初に

あのおと　足音(名)　足の音。(萬葉)

あのよ　(名)　死して行く世界。◆來世。

あのくたらさみさぼだい　阿耨多羅三藐三菩提(句)　梵語より來る。◎無上正遍智覺と譯す。佛の此上もなく正しく智の勝れたる名稱讃する詞。(新古今)

あく　灰汁(名)　灰を水に浸して得たる汁。

あく　幄(名)　あげばりを見よ。

あく　惡(名)　善の反對。◆あしき事。◆わるき事。

あく　飽(自動四段)　滿足の餘り厭はしくなる。◆いやになる。

あく　明(自動四段)　透間の出來る。◆空しくなる。◆開くる。

あく　明(自動下二段)　(一)夜の過ぎ去る。◆年月などの過ぎ去る。◆經過する。○「明くれば慶應四年」(二)戸などのおのづから開くる。

あく　明(他動下二段)　開く。◆からにする。

あぐ　上(他動下二段)　(一)上にやる。◆高くする。(二)上京さする。○源氏「とかくかまへて京に上げ奉りてんといふ」(三)取り上ぐる。◆引き上ぐる。(四)聲に出す。(五)成就する。(六)獻上する。

あぐ　上(助動下二段)　敬語に用ふ。○「申し上ぐ」「聞し上ぐ」

あくい　惡意(名)　惡しき意志。◆惡心。

あくらう　惡靈(名)　あくりやうに同じ。(雅)

あくにん　惡人(名)　あしき人。◆惡事を爲す人。

あくだう　惡道(名)　惡趣に同じ。(佛教)

あくち　口頭瘡(名)　病の名。口の端に出來る腫物。

あくぢよ　惡女(名)　(一)惡心のある女。(二)醜婦。

あくりやう　惡靈(名)　祟りを爲す死靈。又は生靈。◆怨靈。

あくわい　亞槐(名)　大納言の異名。◎三槐に亞ぐの意。

あくわんぼく　亞灌木(名)　植物の分類にいふ詞。灌木と草との中間にあるもの。

あくがる　(自動下二段)　心の身を離れて浮かれ出る。◆身の家を離れて浮かれ出る。

あくがらす　(他動四段)　あくがれさする。◆あこがらす。

あくた　芥(名)　ごみ。

あくたぶ
あくたび　芥生(名)　ごみため。●掃溜。(和名抄)
芥火(名)　芥を焚く火。……多く海士の住家の形容などに云ふ。

あくそう　悪僧(名)　(一)悪事を働く僧侶。(二)猛悪なる僧侶。

あくさう　悪相(名)　悪人らしき人相。

あぐら　胡床(名)　(一)上古屋内にありて安臥休息などしたる處。地上より高く設けたるものにて今の寢臺の類。(二)腰掛。(三)あぐらゐ。

あぐらゐ　胡坐居(名)　胡座に上りて座するやうのすわりかた。●あぐらかく事。

あぐらかく　(句)　兩足を前に組み合はせて座するを云ふ。●あぐむ。

あぐむ　趺(自動四段)　足を組み合はせて坐する。●あぐらをかく。

あぐむ　(自動四段)　退屈していやになる。

あくや　悪口(名)　佛教上戒律の一つ。他人を罵詈する事。

あくや　幄屋(名)　幄舍に同じ。

あくま　悪魔(名)　(一)佛教を妨害する妖魔。天狗の類。(二)悪事を人間に爲す魔神。(三)天使の墮落して悪性となりたるもの。(基督教)

あくまで　飽迄(副)　飽くまで。●充分滿足するまで。●思ふ存分に。

あくぶ　欠(自動四段)　あくびをする。

あぐふう　悪風(名)　(一)暴風。●難風。(二)よからぬ風儀。●悪しき風俗。

あくごふ　悪業(名)　悪事の業報。(佛教)

あくき　悪鬼(名)　悪魔。

あぐぎゃく　悪逆(名)　道に逆ひたる悪事。

あくめ　悪馬(名)　性質の悪しき馬。●荒馬。

あぐみゐ　(名)　あぐらかきて坐する事。●趺坐。

あくみょう　悪名(名)　悪しき評判。●悪評。

あくじ　悪事(名)　あしき事。●悪。

あくしょ　悪所(名)　(一)死後罪悪の人の生るゝ世界。●地獄。……極樂を善所といふに對して。(二)道德上悪しき場所。●遊廓。

あくしょう　悪性(名)　性質のよからぬ事。●浮氣なる事。

あくせうねん　悪少年(名)　よからぬ若者。●不品行なる少年。

あくじん　悪神(名)　猛悪なる神。●邪神。●悪魔。

あくしゃ 幄舍(名) 幄を張り回らしたる假小屋。

あくしゅ 惡酒(名) 惡しき酒。●まづき酒。

あくしゅ 握手(名) 西洋風の禮式。相互に手を握りてする挨拶。

あくしゅ 惡趣(名) 冥途にて罪惡の人の行くところ。……畜生道、餓鬼道、地獄の類。

あくび 欠(名) 眠たき時退屈せる時などにおのづから口の明きて呼吸の出で來る事。

あくびょう 惡病(名) 殊に人の忌み嫌ふ病。傳染病の類。

あくひつ 惡筆(名) 拙筆。

あや 綾、文(名) 〔一〕模樣。●紋樣。〔二〕絹織物の名。色々の文を織り出だして美しきもの。〔三〕糸などを打違にする事。○「綾に綉ぶ」「綾に取る」〔四〕すべて綾のやうに美しきもの。

(感) あゝ。●あな。●あら。○「あやにく」

あやねがさ 綾藺笠(名) 笠の一種。藺にて綾に編みたるもの。武家にては流鏑馬の時などに用ひ。〔甲圖〕又田樂の舞人も之を用ふ。〔乙圖〕

(甲)　(乙)

あやは 漢服(名) 綾織物の名。漢織(あやはとり)の織りたる綾の絹。

あやはとり 漢織、漢服(名) 漢の機織の意。◎漢の國より來りし織工女。又其織りたる絹。

あやに (副) あゝと心の動くほど。●すぐれて。●いみじく。○万葉「うまごりのあやにたしき高光る日の御子」

あやにく 生憎(副) 意地わるく。●丁度折惡しく。(又)—あやにくに。

あやにくし (形。形狀言ク活) あやにくなる。○空穗「さもあやにくき目を見るかな」

あやどる 綾取(他動四段) 綾の如く美しく色ごる。

あやどる 操(他動四段) あやつるに同じ。

あやぬの 綾布(名) 綾に織り出だしたる布。

あやほかど (句) 危けれども。(万葉東歌)

あやはともあ (句) 危けれども。(万葉東歌)

あやかりもの (名) 誰も其人にあやかりたしと思ふほど幸運なる人。又は其物。●仕合者。

あやかる (自動四段) 似る。●似る事を希望する。○「あやかりて孟をいたゞく」

あやがさ 綾笠(名) 綾蘭笠に同じ。

あやがき 綾垣(名) 綾の帳帷。(記)

あやかし (名) 海上に現はれて船を惱ます妖怪。

あやつり 操(名) 〔一〕操る事。●操らるゝ物。〔二〕操人形。

あやつりにんぎゃう 操人形(名) 手足其他に付けたる糸を操りて人形を舞はす事。又は其人形。

あやつる 操(他動四段) 〔一〕打違に釣りたる糸を上下して其物を適宜に動かす。〔二〕うまくあしらふ。●巧に取りあつかふ。

あやなし (形ク形狀言ク活) わけの分らぬ。●條理の立たぬ。●理由の無き。○古今「春の夜の暗はあやなし梅の花色こそ見ねど香やはかくるゝ」

あやなす (他動四段) あやつるに同じ。

あやむ (他動下二段) 怪しむ。●いぶかしと思ふ。●とがむる。○堀川「軒近き花橘の移り香に包まぬ袖も人ぞあやむる」

あやふし 危(形ク形狀言ク活) あぶなし。●危險である。

あやまち 過(名) 仕損じ。●失策。●あやまり。

あやまり 誤(名) 〔一〕間違。●あやまち。〔二〕謝罪。

あやまりじょうもん 誤證文(名) 既往を悔いて後來を慎むべき旨を記したる謝罪狀。

あやまる 誤(他動四段) 〔一〕間違へる。●あやまつ。〔二〕謝罪する。

あやまつ 過(他動四段) 仕損ずる。●間違へる。●失策する。●あやまる。

あやぶむ 危(他動四段) 危しと思ふ。●氣づかふ。

あやぶむ (他動下二段) あやぶましむる。●危くさする。

あやふや ふたしか。●曖昧。△(形)—あやふやな。(副)—あやふやに。(俗)

あやぶみ 危(名) あやぶむ事。

あやことば 文章(名) 雅言の文章。●雅文。

あやぎり 綾切。阿夜岐利(名) 雅樂の曲名。

あやめ 菖蒲(名) 〔一〕草の名。しやうぶ。五月節句に軒に挿しなどして祝ふもの。●あやめぐさ。●さうぶ。〔二〕特には花菖蒲。

あやめ 綾女(名) 綾織る工女。‖あやはとりに同じ。

あやめ 文目(名) あいろ。●差別。●分別。●黑白。○源氏「物のあやめ見給へ分くべき人も侍

らぬわたりなれども」

あやめがたな 菖蒲刀(名)　菖蒲を添へて飾りたる刀。五月節句男子のある家に贈りなどして祝ふもの。

あやめかぶと 菖蒲兜(名)　菖蒲にて作れる兜。五月節句男子のある家に飾りて祝ふもの。

あやめのくらうど 菖蒲藏人(名)　五月五日禁中にて菖蒲を殿上人などに賜ふ事あり。之を配分する役の女藏人。

あやめのこし 菖蒲輿(名)　五月五日禁中に菖蒲を積みて持て參る輿。(散木)

あやめぐさ 菖蒲草(名)　あやめに同じ。

あやし 怪(形。形狀言シク活)　〔一〕奇怪である。●不思議な。〔二〕いぶかし。●疑はし。〔三〕賤し。〔四〕麁末な。

あやしばむ (他動四段)　あやしげに見ゆる。(雅)

あやしむ 怪(他動四段)　あやしと思ふ。●疑ふ。●不審に思ふ。

あやしぶ 怪(他動四段)　あやしむに同じ。

あやしみ 怪(名)　怪しき出來事。●奇怪なる事柄。●妖。●不思議。

あやしび 怪火(名)　火元の怪しき事。放火の類。

あやしび (名)　あやしみに同じ。

あやす (他動四段)　愛相よく幼兒の機嫌を取る。

あやす (他動四段)　汗、血などを流す。●濺ぐ。

あやすぎ 綾杉(名)　杉の美稱。○新古今「千早振香椎の宮の綾杉は神の御就に立てるなりけり」

あま 尼(名)　〔一〕髮を剃りて佛に仕ふる婦人。●比丘尼。〔二〕轉じてはたゞ髮を剃りたる婦人。〔三〕中古にて貴婦人の佛道に歸依して尼になるといふは髮を剃らず禮の邊にて切り下げにする事。

あま 海人。海士。泉郎。蜑(名)　〔一〕海岸に住みて漁を業とする人。●漁人。●漁師。●漁夫〔二〕特には女の漁人。

あま 亞麻(名)　草の名。麻に似たるもの。皮を以て糸を製し織物として夏の衣服に用ふ。

あま 安摩(名)　雅樂の曲名。

あま 天(形)　〔一〕天上の。〔二〕天上の物に擬したる。〔三〕たゞ物の美稱。

あまはし 雨(形)　雨の。

天橋(名)　天の浮橋。

あまはせづかひィ　天馳使（名）　天を馳する程の急使。（記）

あまねうす　遍（他動サ變）　あまねく行き渡らする。

あまにうす　遍（他動サ變）　あまねうすに同じ。

あまど　雨戸（名）　家の最も外側に立つる板戸。

あまとぶ　天飛（自動四段）　空を飛ぶ。

あまとぶや　天飛ぶや（枕）　輕（地名）の枕詞。天飛ぶ雁（かり）（輕と通音）の意。（萬葉）

あまぢ　天路（名）　天上に往復する道。（萬葉）

あまちゃ　甘茶（名）　〔一〕木の名。木甘茶の一名。〔二〕四月八日の灌佛會に用ふる一種の茶。木甘茶の葉に甘草を加へて煎じたるもの。〔三〕甘葛の一名。

あまり　餘（名）　餘る事。又は餘りたる物。●のこり。●殘物。

あまり　餘（副）　度外に。●過度に。●過分に。（又）―あまりに。（形）―あまりなる。

あまりょう　雨龍（名）　蜥蜴に似たる想像の動物。龍の一種として摸樣などに畫かく。〔圖〕

あまりさへェ　剩（副）　あまさへに同じ。

あまりもの　餘物（名）　餘りたる物。●餘計物。●殘物。

あまる　餘（自動四段）　定めたる物よりも多くある。●度に外る。●分に過ぐる。●殘りを生ずる。

あまをとめ　海士少女（名）　漁をなす少女。

あまをとめ　天少女（名）　天津乙女。●天女。●天人。

あまおち　雨落（名）　軒下の雨垂の落つる所。

あまおほひィ　雨覆（名）　雨を防ぐ爲めの覆物。

あまおほひのけィ　雨覆毛（名）　雉子の尾の附際の短き毛。

あまをぶね　海人小舟（名）　海人の乘る小舟。

あまをぶね　海人小舟（枕）　泊瀬（地名）の枕詞。泊（は）つるの意。（萬葉）

あまがべに　天燒（名）　夕燒の一名。○玉海集「下紅葉空にうつすや天が紅」

あまがべに　尼紅（名）　昔し一人の尼あり。他所に密夫を持ちしを尼の父母に告ぐるものあり。父母驚きて尼を叱り懲らしなりといふ故事。俳諧などには多く天が紅に言ひかけて用ひたり。○崑山集「尼が紅つけて稻妻待つ夜かな」

あまがほカ　尼顔(名)　紅白粉など附けぬ顔。●素顔。●地顔。

あまかはソ　雨皮(名)　〔一〕車輿等の雨覆に用ふるもの。絹又は皮に油を引きて作る。〔圖〕〔二〕山伏の旅中雨を防ぐもの。合羽の類。

あまかはソ　甘皮(名)　木實の外皮の次にある皮。●内皮。

あまがつ　天兒(名)　御迦這子(おきばはこ)の類。古へ小兒の凶事を之に負はせて拂ひたるもの。

あまがっぱ　雨合羽(名)　雨中に用ふる合羽。

あまがける　天翔(自動四段)　空を飛び翔る。●空中を往復する。○源氏「降り亂れひまなき空になき人の天かけらなん宿かかなしき」

あまがへるヱ　雨蝦(名)　虫の名。蛙の一種。形小さく綠色又は茶色にて雨の降らんとする時に鳴くもの。

あまがさ　雨笠(名)　雨中に着る笠。

あまがさ　雨傘(名)　雨中に用ふる傘。●からかさ。

あまかぜ　雨風(名)　雨氣の空より吹く風。

あまよ　雨夜(名)　雨降る夜。

あまよそひィ　雨裝(名)　雨裝。●雨支度。

あまた　數多(副)　數多く。●澤山。●いくつもく。(又)ーあまたに。

あまだひィ　甘鯛(名)　魚の名。鯛の一種にして肉白く味美なるもの。

あまたり　雨垂(名)　あまたれに同じ。

あまたるし　(形。形狀言ク活)　甘みが強すぐる。

あまたかへりヱ　數多返(副)　幾遍も。●幾度も。

あまたたび　數度(副)　幾度も。●度々。●數回。

あまたれ　雨垂(名)　〔一〕雨水の軒などより垂るゝもの。〔二〕あまたれおちの略。

あまたれおち　雨垂落(名)　軒下に雨垂の落つる處。

あまたれびやうしヒョ　雨垂拍子(名)　音樂上の詞。長短不動の無き拍子の取方。一二三四にて數へ行かるゝもの。

あまたらす　天足(自動四段)　天と共に長く滿ち足るの意。○萬葉「天の原ふりさけみれば大君の御命は長く天足らしたり」

あまたむ　(枕)　あまとぶやに同じ。

あまだぶり　天田振(名)　上古雅樂寮の歌曲の一種。(記)

あまそそる　（自動四段）　天に聳ゑ立つ。○萬葉「白雲の千重を押し分け。あまそゝり高き立山」

あまそそぎ　雨注（名）　雨の降りかゝる滴。

あまさッうぞく　雨裝束（名）　あましゃうぞく。

あまそぎ　（名）　〔一〕中古貴婦人の尼に爲りたる時禊のあたりにて短く髮を切る事。〔二〕之に似たる小兒の髮。肩の邊まで垂れたるもの。

あまつ　天津（形）　〔一〕天の。●天上の。〔二〕天上の物に擬したる。〔三〕たゞ物の美稱。

あまついはッさか　天津磐境（名）　いはさかを見よ。

あまつはそで　天津羽袖（名）　天人の羽衣の袖。

あまつをとめ　天津少女（名）　天人。●天女。

あまつかなぎ　天津金木（名）　天津掊木の略。大祓の用具。……つかなぎを見よ。

あまつかみ　天津神（名）　〔一〕天上にて生れたる神。〔二〕天上に永住する神。

あまつかぜ　天津風（名）　空吹く風。

あまづたトふッ　天傳（枕）　日の枕詞。空を傳ひゆく日の意味。○萬葉「あまづたふ日のくれぬればこの浦に」同「あまづたふ日笠の浦に」

あまつたくひれ　天津栲領巾（名）　天領巾に同じ。

あまつそら　天空（名）　天。●空。

あまつそで　天津袖（名）　天人の衣の袖。

あまつつみ　天津罪（名）　高天原にての犯罪。

あまづつみ　雨包（名）　雨に包まれ家に籠る事。●雨籠り。

あまづら　甘葛（名）　〔一〕蔓草の名。古へ食物に甘味を付くる爲めに葉を煎じて用ひたるもの。●甘茶。〔二〕甘葛にて製したる甘汁。●蜜煎。

あまつのりと　天津祝詞（名）　天上より傳はり來れる祝詞。（祝詞式）

あまつくに　天津國（名）　天上の世界。神のます處。●天國。

あまつくらゐ　天位（名）　天皇の御位。●てんゐ。

あまつやしろ　天津社（名）　天津神を祭れる社。

あまつさへ　剩（副）　あまさへに同じ。

あまつさへの　剩の（形）　あまりの。●度外の。○正統記「それまでは、あまつさへの事なり」

あまつめ　天津女（名）　天津少女。●天女。

あまつみおや　天津御祖（名）　天皇の御先祖。●天祖。●皇祖。

あまつみかど　天津御門（名）　天朝。●朝廷。

あまつみづ　天津水(名)　雨。◆天水。

あまつみづ　天津水(枕)　仰ぎ待つの枕詞。(萬葉)

あまつみや　天津宮(名)　高天原の宮殿。

あまつみやごと　天津宮事(名)　天津宮にて行ふ儀式。

あまつしるし　天津璽(名)　天孫たる事を證するための物品。○祝詞式「皇御孫命を天津高御座にませて天津璽の鏡劍を捧げ持ち給ひて言壽ぎ宣ひしく」

あまつひ　天津日(名)　天にある日。◆天日。◆太陽。

あまつひと　天津人(名)　天上の人。◆天人。

あまつひつぎ　天津日嗣(名)　天照大神の御繼統の意。◎天皇の御位。

あまねし　遍。普(形。形狀言ク活)　全體に行き渡りたる有樣。◆一般である。◆平等である。

あまな　甘菜(名)　辛菜を見よ。

あまなノふッ　甘(自動四段)　あまんずる。◆快く承諾する。

あまんず　甘(他動サ變)　よしと思ふ。◆滿足する。◆甘受する。

あまのいはッと　天磐戸(名)　天上の岩戸。……岩戸を見よ。

あまのいはッふね　天岩船(名)　古へ神の乘りて天上を通ひし舟。

あまのばそで　天の羽袖(名)　天津羽袖に同じ。

あまのはら　天原(名)　大空。◆虛空。

あまのにぼこ　天瓊矛(名)　あまのぬぼこの訛り。

あまのにのまひィ　安摩の二舞(名)　二の舞を見よ。

あまのと　天戸(名)　(一)天の岩戸。(二)夜の明くるを戸を明るに見なして云ふ詞。○詞花「夜もすがら叩く水鶏は天の戸を明けて後こそ音せざりけれ」(三)天を海路に見なして云ふ詞。○古今「秋風に聲を帆にあげて來る舟は天の戸わたる船にぞありける」

あまのとぼこ　天瓊矛(名)　あまのぬぼこの訛り。

あまのり　甘海苔(名)　海苔の一種。甘味あり食品として貴ばるゝもの。

あまのぬぼこ　天瓊矛(名)　伊弉諾伊弉冊尊の天神より賜ひて國土を造り成し給ひし矛の名。……ぬぼこを參考せよ。

あまのかはッ　天川(名)　(一)夜の空に川の如く見ゆる小き星の集り。◆銀河。(二)七月七日天上にて牽牛織女の相逢ふといふ中間の場所にあ

る川。すなはち天川を水の流と見なしての想像。〔三〕杉木の洞。

あまのよさづら 天吉葛(名)　杓(ひさご)の古名。(祝詞式)

あまのむらぎみ 天村君(名)　天上の村長。……村君を見よ。

あまのうきはし 天浮橋(名)　神代の古へ天上と地上との通路のため虛空に渡したる橋。(記)

あまのやそかげ 天八十蔭(名)　廣大なる宮殿。(記)

あまのまてかた 海人馬蛤潟(名)　海人の馬蛤を捕る干潟。……まてかたを見よ。

あまのさかで 天逆手(名)　古へ人を呪ふ時にせし一種の手の拍ち方。○伊勢「天の逆手を打ちてなん呪ひける」

あまのみす 天御巢(名)　御巢を見よ。

あまぐ 雨具(名)　雨中用具の總名。合羽、傘、足駄の類。

あまくり 甘栗(名)　甘味の栗の實。大饗の時用ふるもの。

あまくりのつかひ 甘栗使(名)　大饗の日甘栗を賜ふ爲に下さるゝ勅使。

あまくだる 天降(自動四段)　天より降る。

あまくだす 天降(他動四段)　天降らしむる。

あまくさ 甘草(名)　草の名。=かんざうに同じ。

あまくさど 天草砥(名)　砥石の一種。肥後の天草より産するもの。

あまぐも 天雲(名)　天の雲。

あまぐも 雨雲(名)　雨天の雲。

あまぐもり 雨曇(名)　雨を持ちたる曇り。

あまぐもの 天雲の(枕)　たゆたふゆくゆくらくにおくかもしらずたぎもしらず別れしゆけばなどの枕詞。(萬葉)

あまや 尼屋(名)　尼の住む家。

あまやどり 雨宿(名)　途中にて雨を避くる事。

あまやかす (他動四段)　あまねさする。

あまま 雨間(名)　雨の降り止みたる間。

あまけ 雨氣(名)　雨を持ちたる天氣。●雨空。

あまぶね 海人船(名)　海人の乘る船。●漁船。

あまごひ 雨乞(名)　神佛に降雨を祈る事。

あまごろも 天衣(名)　天人の衣。

あまごろも 雨衣(名)　雨着。●あまぎぬ。

あまごろも 尼衣(名)　尼の法衣。

あまごろも 海人衣(名)　海人の着る衣。

あまごろも 海人衣(枕) 田蓑の島の枕詞。(古今)

あまごとうた 天語歌(名) 上古雅樂寮の歌曲の名。(記)

あまごもり 雨籠(名) 雨中外出し兼れて家に在る事。

あまごもり 雨隠(枕) 三笠山の枕詞。雨にこもり隱る、笠の意。(萬葉)

あまごぜん 尼御前(名) 尼の尊稱。

あまえいたし (形。形狀言ク活) 甚しくあまゆる有樣。(雅)

あまてる 天照(自動四段) 天照らすに同じ。

あまでら 尼寺(名) 尼の住む寺。●比丘尼寺。

あまてらす 天照(自動四段) 天上にありて宇宙を照らす。

あまあし 雨脚(名) 雨の足。

あまざはり 雨障(名) 雨に妨げられて外出の出來ぬ事。

あまざかる (枕) あまざかるの訛り。

あまざかる 天離(枕) 鄙の枕詞。都より天を隔てゝ遥ざかるの意。○萬葉「天ざかる鄙に五年すまひつゝ都のてぶり忘らえにけり」

あまざらし 雨晒(名) 雨に打たるゝ儘になし置く事。

あまざけ 甘酒(名) 酒の一種。米の飯と麹にて醸したる甘味白色のもの。

あまさへ 剰(副) 其上。●加ふるに。

あまき 甘木(名) 甘草の古名。(和名抄)

あまぎ 雨着(名) 雨を防ぐ爲めの着物。合羽、外套の類。●雨衣。

あまぎぬ 雨衣(名) 雨着に同じ。

あまざる 天霧(自動四段) 空の眞暗になる。●空一面に烟る。●曇る。○新古今「山高み峯の嵐に散る花の月にあまぎる明方の空」

あまざらす (自動四段) あまざるに同じ。

あまゆ (自動四段) あまざるに同じ。

あまゆ (自動下二段) 愛せらるゝまゝに我儘をする。

(自動下二段) 後悔する。●謝罪する。○大鏡「遺恨のわざをもしたりけるかなとてあまえおはしましけり」

あまみづ 雨水(名) 雨となりて降りたる水。●雨の溜りたる水。

あまみす 甘(他動サ變) あまんずに同じ。

あまし 甘(形。形狀言ク活) (一)蜜砂糖などの味のする。(二)辛みの少なき。(三)にぶし。●手ぬるし。

あまじほ

甘鹽(名)　〔一〕煮物菜などに鹽氣の薄き事。〔二〕魚類など薄鹽に漬くる事。又は其物。

あましゃうぞく

雨裝束(名)　雨天に外出する時の裝ひ。●雨支度。

あまじたり

雨滴(名)　雨垂。(和名抄)

あまじめり

雨濕(名)　雨の爲めに濕氣をおぶる事。

あまじし

癤(名)　餘肉(あまり)の意。◎皮膚の外に突出せる餘分の肉。疣、瘤の類。

あまびと

海士人(名)　あまに同じ。

あまびと

天人(名)　てんにん。●天女。

あまびたひぃ

尼額(名)　尼そぎになりたる人の額。

あまひれ

天領布(名)　雲を領布(ひれ)に見立てゝ云ふ。(萬葉)

あまびこ

天彦(名)　虚空の反響。

あまもよ

(名)　雨夜。

あませ

尼前(名)　尼御前に同じ。

あます

餘(他動四段)　餘らしむる。●殘す。

あますがた

尼姿(名)　尼そぎになりたる人の頭付。

あけ

朱(名)　〔一〕色の名。赤。●紅。●緋。○「朱の鳥居」「朱の衣」〔二〕五位の袍。

あけ

明(名)　〔一〕明くる事。〔二〕夜の明くる頃。●夜明。●曉。

あげ

揚(名)　食品の名。油揚の略。

あげ

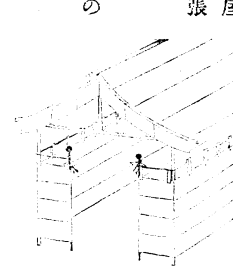
上(名)　上ぐる事。

あげば

揚場(名)　船の荷を揚ぐる所。

あげばり

幄(名)　假屋の屋根と四方とに張る一種の幕。



〔圖〕

あけはなる

明離(名)　夜の全く明くる。

あげはのてふ

鳳蝶(名)　紋の名。羽を廣げて上げたる形を畫かけるもの。

あけぼの

曙(名)　〔一〕夜のしら〳〵と明くる頃。●明方。〔二〕曙染の略。

あけぼのぞめ

曙染(名)　染方の名。一方は濃くしてそれより漸次に薄くしたるもの。●ぼかし。

あげど

揚戸(名)　明くる時には上に押し揚ぐる樣に作りたる戸

あげを

上緒(名)　冠の緒。

あけがた

明方(名)　夜の明くる頃。●夜明。●曉。

あけたつ 明立(自動四段) 夜の十分明くる。

あげつちもん 上土門(名) 門の一種。屋根に土を積み上げたるもの。

あげづかさ 上官(名) 官の昇進。○平家「下野は紀の守にこそなれにけれよしとも見ねあげづかさかな」

あげつらひ 論(名) ろん。●評論。●議論。

あげつらふ 論(他動四段) 論ずる。●議論する。●評論する。

あげつげどり 擧歌(名) 上古 樂寮の歌曲の一種。

あげうた 朱御袍(名) 冕服。●袞龍御衣。

あげのごはう 晩明星(名) 星の名。曉に出づる明星。

あげのみやうじやう

あけくる 明暮(自動下二段) 夜が明け又日が暮るゝ。

あけくらす 明暮(他動四段) 夜を明かし又日を暮らす。

あけくれ 明暮(名) 夜の明と日の暮と。●朝夕。

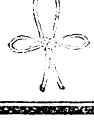
あけくれ 明暮(副) 夜明にも夕暮にも。●常に。●不斷。

あけぐれ 明暗(名) 夜明の薄暗き時。○風雅「旅衣朝立つ人はたゆむなり霧に曇れる明暗の空」

あげや 揚屋(一) (名)德川時代牢の一種。今の未決監の如きもの。(二)遊女を呼び揚げて遊興する家。●貸坐敷。

あげまく 揚幕(名) (一)能舞臺にて橋掛りの出口に垂れたる幕。(二)芝居の花道の出入口にある幕。

あげまき 總角(名) (一)童子の髮の名。左右に分けて輪に結ひたるもの。稚兒髻の類。(二)髮を總角に結ふ程の年齡の子供。十歳前後。(三)紐の結び方の名。裝飾に用ふる總の紐など多く之を用ふ。(圖)(四)神樂歌の曲名。(五)雜馬樂の曲名。



あけぶた 上蓋(名) 蓋を附けて横に結めたる箱の蓋。

あけごろも 緋袍(名) 赤色の袍。五位の制服。

あげごし 上輿(名) 乘物の一種。肩に載せて舁く輿。

あけて 擧げて(副) のこさず。●皆。●こぞりて。

あげじとみ 上蔀(名) 蔀の一種。上に吊り上ぐる樣に造りたるもの。

あげしほ 上汐(名) 差して來る汐。

あけび 通草(名) 蔓草の名。夏花咲き秋瓜に似て大きく甘き實を結ぶもの。

あげもの 揚物(名) 食品の名。野菜類に饂飩粉の衣をかけ油揚にしたるもの。

あぶ 虻(名) 虫の名。蠅に似て少し大きく血を吸ふもの。

あぶ 浴(自動上二段) 水湯などに掛かる。●浴する。●あびる。

あぶりもの 炙物(名) 料理の詞。炙りたる肉類。●燒物。(和名抄)

あふる 溢(自動下二段) 水の滿ちてこぼれる。

あぶる 炙(他動四段) 遠火にて程よく燒く。●火にて暖むる。

あぶる (自動下二段) 〔一〕おちぶるゝ。●零落する。○源氏「かくまで落ちあぶるべき際とは思ひ給へざりしを」〔二〕世の捨物になる。●無用物になる。

あぶれもの (名) 無用の人。●世の捨者。

あぶなあぶな (副) 危みながら。●危險に思ひながら。

あぶなし 浮雲(形。形狀言ク活) 危し。●危けである。●けんのんな。

あぶら 膏(名) 動物の肉にある油氣多き部分。●油身。●脂肪。

あぶら 油(名) 植物又は動物より搾り取る一種の粘液。其種類多く用途も亦廣し。

あぶらわた 油綿(名) 油に浸したる綿。髮の具として用ひたるもの。(和名抄)

あぶらがめ 油瓶(名) 燈に用ふる油を入れ置く瓶。●油壺。(和名抄)

あぶらがみ 油紙(名) 油を塗りたる紙。●桐油紙。

あぶらづく 膏付(自動四段) 肌の脂肪多くなる。

あぶらつき 油盞(名) 油皿の古名。

あぶらな 油菜(名) 菜の一種。其實を取りて油を搾るもの。黄色の美しき花咲くを菜の花といふ。

あぶらむし 油蟲(名) 〔一〕虫の名。蟬に似て小さく總身燈油の色にて手に取れば頗る惡臭を放つもの。〔二〕其勞を取らずして徒に其中間に入り居る人。

あぶらのつかさ 主油司(名) 宮廳の名。宮内省に屬して諸國より奉る油を掌るところ。

あぶらげ 油揚(名) あぶらあげの略。

あぶらゑ 油畫(名) 洋風畫の一種。油を加へたる彩具

にて畫がくもの。

あぶらあげ 油揚(名) 〔一〕油にて食品を煎る事。又は其物。〔二〕特には豆腐を油にて揚げたるもの。

あぶらあせ 膏汗(名) 膏まじりに出づる汗。

あぶらざら 油皿(名) 燈火の油を盛る皿。之に燈心を渡して火を點ず。

あぶらさし 油差(名) 油皿に差す爲めに油を入れ置く器。形銚子に似たるもの。

あぶらぎく 油菊(名) 野菊の一名。

あぶらみ 膏身(名) 魚、鳥、獸の肉の脂氣多き所。

あぶらひ 油火(名) 油を用ひて燈す火。●燈火。

あぶらもち 油持(名) 公家外出の時車に差す油を用意して持つ下男。

あぶらもり 油守(名) 女官の名。禁中にて燈火の事を掌るもの。

あぶく 泡(名) あわ。(俗)

あぶさ、ふ (他動四段) あぶすに同じ。○萬葉、四方の人をもあぶさばすめぐみ給へば」

あぶみ 鐙(名) 馬具の名。足を蹈み掛くる爲めのもの。

あぶす 浴(他動四段。又下二段) あびせる。●ぶっ掛ける。

あぶす (他動四段) 餘す。●殘す。●漏らす。(雅)

あこ 下火(名) 火葬を行ふ時火をつくる役をなす僧。

あこ 吾子(名) 〔一〕自身の子を呼ぶ詞。〔二〕人の子を親しみ呼ぶ詞。〔三〕人を親しみ呼ぶ詞。

あこ (代) あそこ。●あしこ。●あすこ。

あご 網子(名) 網を引く漁夫。

あご 吾子(名) あこに同じ。(古)

あこがる (自動下二段) あくがるに同じ。

あこがらす (他動四段) あこがらしむる。

あかつう 阿衡(名) 攝政の異名。

あこやがひ 阿古屋貝(名) 貝の名。眞珠貝の一名。●蝶貝。●袖貝。●珠貝。

あこやだま 阿古屋玉(名) 阿古屋貝より出づる玉。●眞珠。

あこえ 距(名) 鳥の蹴爪。(和名抄)

あこめ 袖(名) 〔一〕男子裝束の時の下着。單と下襲の間に着るもの。(圖)〔二〕古代童女の上衣。

あこめあふぎ 袖扇(名) 貴婦人禮服の時に持つ檜

扇。三十九枚の板にて作り。其綴糸の兩端を鮑結びにして長く垂らし又造花などの飾を加へたるもの。糸は萌黄、黄、薄紫、紅、白、紫の六種を常とす。〔圖〕

あこめのはな

袍花(名)　草の名。薄の異名。

あこめぎぬ

袍衣(名)　古へ童女の上衣。

あへヱ　饗(名)　饗應の食品。

あへヱ　和(名)　料理の調。味噌、胡麻、豆腐などの類を肉野菜などに混ぜて揉み合はせたるもの。

あへぬく

(他動四段)　一つに集めて貫き通す。○萬葉「我脊子は玉にもがもな時鳥聲にあへぬき手にまきてゆかむ」

あえか

物はかかなくか弱き有樣。●若々しき有樣。●しなく。●ぐにやく。(形)―あえかなる。(副)―あえかに。○源氏「たのもしげなくあえかにおはします」

あへヱ**づくり**

齏作(名)　料理の調。切りたる肉を入れたるあへもの。(和名抄)

齏坏(名)　齏物を入るゝ器。(延喜式)

あへヱ**つき**

あへヱ**なん**

(句)　然るべし。●適當ならん。●堪忍が出來る。(雅)

あへヱ**なし**

(形。形狀言ク活)　張り合ひなし。●拍子抜けがしたる。●手持無沙汰である。○源氏「いとはかなき煙にて程なくのぼり給ひぬるも例の事なれどあへなくいみじ」

あえん

亞鉛(名)　金屬鑛物の名。鉛に似て脆きもの。●とたん。

あへヱ**ぐ**

喘(自動四段)　呼吸の激しくなる。●息が切るゝ。●せいくする。

あへヱ**て**

敢(副)　〔一〕憚らずに。●堪へて。〔二〕さらさら。●一向に。●ちよつとも。○宇治「あへて口より外に出ださず」

あへヱ**しらひ**ィ

(名)　あへしらふ事。又はあへしらひたるもの。

あへヱ**しらふ**ハウ

(他動四段)　〔一〕應答する。●待遇する。●取扱ふ。〔二〕風味又は興味あらしむるため附屬品を添ふる。○「刺身に生姜をあへしらふ」「櫻の花に小鳥をあへしらふ」〔三〕唄

に音樂を加ふる。

あえもの 肴物(名) あやかりものに同じ。(雅)

あへもの 和物(名) 食品の名。あへに同じ。

あへず (自動) すは打消の助動詞なればぬれじでなどゝも變化す。◎能はぬの意。●出來ぬの意。●希望せし事のまだ來らぬの意。○古今「山川に風のかけたる柵は流れもあへぬ紅葉なりけり」後撰「時雨ふりふりなば人に見せもあへず散なば惜しみ折れる秋萩」

あて 當(名) (一)當つる事。(二)當つる物。(三)目的。●目途。

あて 貴(名) 高貴。●上品。△(形)—あてなる。(副)—あてに。(雅)

あてはか あてなる有樣。●上品なる有樣。(形)—あてはかなる。(副)—あてはかに。

あてはむ (他動下二段) はまるやうにあて置く。●適合さする。

あてばむ (自動四段) あてに見ゆる。●上品に見ゆる。(雅)

あてがひ 宛行(名) あてがふ事。又はあてがひたる其物。

あてがひぶち 宛行扶持(名) 君主より額を定めて渡す扶持米。又は食料。

あてがふ 宛行(他動四段) (一)あてはめる。(二)先方の望通り如何程と定めて物を與ふ。

あてな 宛名(名) 手紙などの表に書く先方の名前。●名宛。

あてやか あてはかに同じ。(形)—あてやかなる。(副)—あてやかに。

あてぶみ 宛書(名) 其人に當てゝ贈る書面。

あてこと 當事(名) 目的。●目途。●希望。

あてあて 適當に割り付くる事。(形)—あてあてなる。(副)—あてあてに。(雅)

あてみ 當身(名) 柔術にて急所を衝き氣絶さする事。

あてじ 當字(名) 發音の同じき儘に意味の異なる漢字を濫用する事。……少女を乙女と書き表ましを浦山しと書くの類。

あてびと 貴人(名) 身分の貴き人。●貴顯。●きにん。

ああ (副) あんなに。●あれほどに。●あのくらゐ。○「あゝは出來ぬ」「あゝすればよかった」(俗)

ああ 嗚呼(感) 喜怒哀樂の心にあまりて口に發する

聲。

ああめん (感) 基督教にて祈禱の終に唱ふる詞。其誠意より出でたるを示す意味。

ああめんしゅう (名) 基督教の異名。

ああしやこしや (感) 嘲り笑ふ聲。(古)

あさ 麻(名) (一)草の名。莖は蓬に似て直立し葉は楓に似て大なるもの。皮を製して糸とし種々の用に充つ。(二)麻の皮より得たる纖維。(三)麻の纖維より取りたる糸。(四)麻の糸にて織りたる切地。

あさ 朝(名) 日の出より正午まで。●午前。

あざ 痣(名) 皮膚の上にある一種のしみ(和名抄)

あざ 字(名) 一町村の中の小名。

あさい 朝寢(名) あさね。(雅)

あさいひ 朝飯(名) 朝の食事。●あさめし。

あさいと 麻糸の(名) 麻より取りたる糸。

あさはか 物事の淺き有樣。(形)—あさはかなる。(副)—あさはかに。

あさはなだ 淺縹(名) 染色の名。薄き花田色。

あさぼら 朝腹(名) 朝飯前の腹工合。

あさはぶる 朝羽振(自動四段) 朝立つ波を鳥の羽振るに見立てていふ詞。……夕波を夕羽振といふ。○萬葉「饒田津の荒磯の上に。香青なる玉藻沖津藻。朝はぶる風こそ依らめ。夕はぶる波こそ來よれ」

あさにはゝ 朝庭(名) 朝の庭。

あさぼらけ 朝則(名) 夜の明け際。●明け方。●ほんのりあけ。

あさど 朝戶(名) 朝の戶。……開閉する時にいふ。

あさどり 朝鳥(名) 朝飛ぶ鳥。

あさどりの 朝鳥の(枕) 通ふ鳴く朝立つなどの枕詞。(萬葉)

あさとがり 朝鳥狩(名) 朝する鳥狩。

あさどこ 麻床(名) 朝の寢床。

あさとで 朝戶出(名) 朝戶を出づる事。

あさぢ 鰤(名) 魚の名。鰤の老いて色の赤みたるを云ふ。(散木)

あさぢ 淺茅(名) 草の名。茅萱。

あさぢはら 淺茅原(枕) つばら〳〵の枕詞。似たる言を重ねて云ふ。(萬葉)

あさぢはら 淺茅原(名) 淺茅の生ひたる野原。●淺茅生。

あさぢはらぶり　淺茅原振(名)　上古雅樂寮の歌曲の名。(續紀)

あさぢふ　淺茅生(名)　茅萱の生ひたる所。

あさちゃ　朝茶(名)　朝起きて飲む茶。

あさり　淺蜊(名)　貝の名。蛤に似て小さく殼に縱筋あり食用となるもの。

あさり　漁(名)　あさる事。

あざり　阿闍梨(名)　僧侶資格の名。清和天皇よりは勅によりても賜はり佛家にては殊に重しとするもの。

あさぬの　麻布(名)　麻にて織りたる布。

あさる　漁(他動四段)　すなどる。●漁する。

あさる　(他動四段)　さがす。●尋ぬる。●求むる。

あさる　(自動四段)　鳥の餌を求めあるく。○萬葉「春の野にあさる雉子の妻戀におのがありかを人に知れつゝ」

あざる　(自動下二段)　魚肉の腐る。●腐敗する。(雅)

あざる　(自動下二段)　戲る。●ふざける。●される。(雅)

あざはる　糾(自動四段)　あざなはるに同じ。

あざわらふ　嘲笑(名)　嘲り笑ふ。

あさがり　朝獵(名)　朝の獸獵。又は鷹狩。(萬葉)

あさがほ　朝顏(名)　朝の顏色。●寢起の顏付。

あさがほ　朝顏(名)　〔一〕古へは朝美しく咲く花の總名。〔二〕蔓草の名。葉は桐に似て鉛を仰向けたる如き紅、藍、白、紫等の花秋の初に咲く。……蕣又は牽牛花とも書く。〔三〕桔梗。……秋の七草に加はりたるは是なり。〔四〕木槿……槿の字をも書く。〔五〕重の色目の名。表裏共に花田。

あさがほなり　朝顏形(名)　牽牛花の花に似たる形。

あさがほひめ　朝顏姬(名)　織女の異名。

あさがたち　朝容(名)　朝の容貌

あさがれひ　朝飯(名)　朝飯。

あさがれひのにはの　朝飯の庭(名)　朝飯の間の御庭。

あさがれひのおもの　朝飯の御物(名)　天皇の御朝飯。

あさがれひのま　朝飯の間(名)　天皇の朝飯を召上がる御殿。清涼殿の內夜御殿の西にあり。

あさがら　麻稈(名)　皮を取り去りたる麻の莖。●苧殼。

あさかげ　朝影(名)　朝日の反射。

あさかげ　朝陰(名)　朝日の照らさぬところ。

あさがみ　麻紙(名)　紙の名。麻にて漉きたるもの。●

まし。

あさがみ 朝髪(名) 朝の髪。●寢起の儘にてまだ繕はぬ髪。

あさがみしも 麻上下(名) 麻布にて造りたる上下。德川時代武士の禮服。

あさがすみ 朝霞(名) 朝立つ霞。

あさがすみ 朝霞(枕) 八重かびやほのかなどの枕詞。(萬葉)

あさだ 淺田(名) 泥の淺き田地。

あさだち 朝立(名) 朝の出立。

あさづくよ 朝月夜(名) 明け殘る月夜。●月の殘りてある朝。

あさづくひ 朝付日(名) 朝日。

あさづくひ 朝付日(枕) 向ひ向ふの枕詞。朝日には皆人の喜び向ふものなれば云ふ。○萬葉「朝づく日向の山に」

あさつまぶね 朝妻船(名) 近江朝妻の渡舟。古へ此地は遊女の居たるところ。○夫木「鳴の海や淺妻舟も出でにけりつなぐ氷を風や解くらん」

あさづけ 淺漬(名) 漬物の名。干大根を薄鹽の糠漬にすること。又は其物。

あさって (名) 明後日。

あさつき 淺葱(名) 葱の一種細くして色の薄きもの。

あさつゆ 朝露(名) 朝置きたる露。

あさつゆの 朝露の(枕) けやすきけなば消ゆ置くなどの枕詞。

あさね 朝寢(名) 朝遲くまで眠り居る事。

あさねがみ 朝寢髪(名) 朝の寢起の髪。

あさな 朝菜(名) 朝飯の時に食ふ料の野菜。

あざな 字(名) 〔一〕實名の外の呼名。〔二〕特には通稱。……八郎平三の類。〔三〕特には支那人の呼名。……(諸葛)孔明、(蘇)子瞻の類。〔四〕特には漢學者の支那人に擬して設けたる名。〔五〕町村内の小名。

あざなはゥる 糾(自動四段) なはるゝ。●ふれる。●かゝる。

あざなゝふゥ 糾(他動四段) 繩などを綯ふ。●よりあはす。○「禍福は糾へる繩の如し」

あさなけに (副) 毎朝。●朝毎に。(歌詞)

あさなあさな (副) 毎朝。●朝毎に。

あさなさな あさなあさなの略。(歌詞)

あさなぎ 朝風(名) 朝の風。風又は波の立たぬ時。

あさなゆふな (副) 朝夕。❀あけくれ。(又)—あさなゆふなに。△(形)—あさなゆふなの。

あさら (名) 芹の古名。

あさら 淺き有樣。(形ノ)—あさらなる。(副)—あさらに。(雅)

あさらか 淺き有樣。(形)—あさらかなる。(副ノ)—あさらかに。

あざらか 鮮 魚類などの新らしき有樣。❀新鮮。(形)—あざらかなる。(副)—あざらかに。

あざらけし 鮮(形。形狀言ク活) あざらかなる有樣。❀清く新らし。❀新鮮である。

あざらし 海豹(名) 海獸の名。形毛色とも稍や豹に似て北海に住むもの。

あさむ (自動四段) 驚く。❀あきれる。

あざむ (他動四段) 嘲る。❀嘲弄する。

あざんづ 淺水(名) 催馬樂の曲名。

あざんづのはし 淺水橋(名) 催馬樂の曲名。

あざむらさき 淺紫(名) 染色の名。薄き紫色。

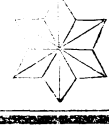
あざむく 欺(他動四段) 謁る。❀だます。❀詐欺する。

あざふ 淺(自動下二段) 淺くある。❀淺はかである。❀輕々しくある。○源氏「さやうにあさへたる事にかへりて輕々しきもどかしさなども立ち出で〜」

あざふ 綫(他動下二段) あざなふに同じ。

あざうらざうり 麻裏草履(名) 草履の一種。麻を平たく組みて裏に附けたるもの。

あさのは 麻葉(名) 模樣の名。麻の葉の形に擬したるもの。〔圖〕



あさくちなし 淺梔(名) 染色の名。薄き梔色。

あさぐつ 淺沓(名) 公家裝束の時に履く木製漆塗の沓。〔圖〕

あさくら 朝倉(名) 〔一〕神樂歌の曲名。〔二〕古代物語の名。但し世に傳はらず。(狹衣)

あさくさがみ 淺草紙(名) 漉返し紙の下等なるもの。

あさぐも 朝雲(名) 朝空の雲。

あざやか 鮮 あきらか。❀さやか。❀はっきり。❀清く美しき有樣。(形)—あざやかなる。(副)—あざやかに。

あざやぐ 鮮(自動四段) あざやかである。(雅)

あざやけ 朝燒(名) 日の出前の空の燃ゆるが如く赤き

事。

あさま 朝間(名) 朝の間。

あさまに (副) あらはに。●むきだしに。

あさまだき (副) 夜の明け切らぬ程に。●早朝に。

あさまつりごと 朝政(名) 天皇の臨み給ふ朝の御政務。

あさまし (形。形狀言シク活) あきれたる有樣。●けしからぬ。●胸のつぶれた。

あさけ 朝飯(名) 朝食ふ飯。●あさめし。

あさけ 朝明(名) あさあけの略。

あざけり 嘲(名) 嘲弄。●物笑。

あざける 嘲(他動四段) 嘲弄する。●罵り笑ふ。

あさぶ 淺(自動四段) 〔一〕淺くなる。〔二〕輕蔑する。……(雅)

あさぬすま 麻衾(名) 麻布にて作れる衾。

あさごろも 麻衣(名) あさぎぬに同じ。

あさごち 朝東風(名) 朝吹く東風。

あさゑ 朝餌(名) 鳥獸などの朝食ふ餌。(月詣)

あさて (名) 明後日。

あさで 淺手(名) 淺き手傷。●微傷。●輕傷。

麻手(名)、〔一〕麻の織物。〔二〕麻織物の原料の草。(歌詞)

あさでごぶすま 麻手小衾(名) 麻布にて作りたる小衾。(万葉)

あさあね 淺藍(名) 染色の名。薄き藍色。

あさあらし 朝嵐(名) 朝吹く嵐。

あさあけ 淺緋(名) 染色の名。淺き緋。……古へ五位の制袍に用ひし色。

あざあけ 朝明(名) 夜の引明。●夜明。

あざあざ (副) あざやかに。●判然と。●明らかに。

(又)—あざ〳〵と。

あさあさし 淺淺(形。形狀言シク活) 淺し。●あさはかなる。

あざあざし 鮮鮮(形。形狀言シク活) あざやかなる。●はっきりしたる。鮮明なる。●隱れなし。

あさあめ 朝雨(名) 朝降る雨。

あさざ 荇(名) 水草の名。蓴菜に似たるもの(和名抄)

あさらす 朝座(名) 朝ある說法の一席。……日に二度ある時夕座に對して云ふ。

あさらる (自動四段) 朝になる。

あさらむ (副) 朝毎に必ず。○萬葉「落瀧つ清き河内に。朝さらず霧立ちわたり」

朝寒(名) 晝はさもなくて朝の間のみ寒き

事。秋の半頃よりの陽氣。

あさぎ

淺木(名)　粗惡なる材木。殊に節多きもの。○新六帖「柚山の淺木の柱ふししげみ引き立べくも無き我身かな」

あさぎぎ

淺葱(名)　染色の名。〔一〕薄き黄色。古へ無品親王の御袍の色など之を用ひたり。〔二〕薄き藍色。❷水色。……淺葱とも書く。

あさぎぎりの

朝霧(名)　朝立つ霧。

あさぎぎりの

朝霧の(枕)　思ひまどひての枕詞。(萬葉)

あさぎぎぬ

麻衣(名)　麻糸にて織りたる衣。

あさぎぎよめ

朝清(名)　朝の掃除。

あさぎぎた

朝北(名)　朝吹く北風。

あさゆ

朝湯(名)　朝の入湯。

あさめ

朝目(名)　朝見る目。❷朝のながめ。

あさめ

(名)　天皇の御膳の事に仕奉る女官。(江次第)

あさめし

朝飯(名)　朝食ふ飯。

あざみ

薊(名)　草の名。葉は柊に似て大きく薄く和かく。花は總(ふさ)のやうにて薄紫色に咲くもの。總體刺ありて觸るれば手を刺す。

あさみどり

淺綠(名)　〔一〕染色の名。薄き綠色。〔二〕催馬樂の曲名。

あさし

淺(形。形狀言ク活)　深からぬ。❷うすし。❸ちかし。

あさじぬはら

淺篠原(名)　深からぬ篠原。(記)

あさしほ

朝潮(名)　朝滿つる潮

あさじめり

朝濕(名)　朝の濕り。

あさじみ

朝凍(名)　朝のしみ氷り。

あさしも

朝霜(名)　朝置きたる霜。

あさしもの

朝霜の(枕)　けなばけやすきけぬべく置くなどの枕詞。

あさひ

朝日(名)　朝出づる日。

あさびらき

朝開(名)　朝の出船。○萬葉「世の中を何にたとへん朝開き漕ぎ行く舟の跡なきがごと」

あさひの

朝日の(枕)　笑み榮ゆの枕詞。(記)

あさひのみや

朝日の宮(名)　伊勢の大神宮。

あさひこ

朝彦。朝日子(名)　朝日。○六帖「朝彦がさすや岡邊の松の葉のいつとも知らぬ戀もするかな」

あさもよひィ

(枕)　あさもよしの音便。……但し轉じては紀の國に掏はらず總べて音の枕詞にも用ふ。○謠曲「行けば深山も朝もよい木曾

あさもよし　路の旅に出でうよ」

（枕）　紀（國の名。即ち紀伊）の枕詞。○萬葉「朝もよし紀人ともしも待乳山ゆきくると見らん紀人ともしも」

あさせ　淺瀬（名）　淺き川瀬。

あさず　（副）　一説には淺からず御心深くの意。一説には飲み干す間なくつぎかけ〳〵の意。○記「奉り來し御酒ぞ。あさずをせさゝ」

あさずはう　淺蘇枋（名）　染色の名。薄き蘇枋色。

あさすず　朝涼（名）　朝の間の涼しさ。又その涼しき間の時。

あき　商（名）　商賣。●あきなひ。

あき　秋（名）　稻の赤らむ（赤らみの約音あきとなる）の意。◎四季の第三。太陰曆七月より九月まで。太陽曆八九十の三ヶ月。

あき　明（名）　明きて居る處。●あきま。●透間。

あぎ　飽（名）　あく事。●いやになる事。

あぎ　顎（名）　口の上下の處。●あきと。●あご。

あぎはぎ　吾君（名）　人を親しみ呼ぶ詞。●あこ。

あきはぎ　秋萩（名）　秋花の咲く萩。●萩の花。（歌詞）

あきほ　秋穗（名）　秋になりて出づる穗。

あぎと　顎。鰓。鰓（名）　あご。●あご。

あぎとふ　嶮喝（自動四段）　〔一〕魚の水上に頭を出して口を開閉させる。〔二〕小兒などの口を大きく開き物言はんとしてもぐ〳〵させる。……（雅）

あきる　呆（自動下二段）　驚きて茫然となる。●びっくりする。

あきかたまけて　（句）　秋方向けての意。◎秋に向ひて。●秋の時候に爲りて。（萬葉）

あきかぜ　秋風（名）　〔一〕秋の風。〔二〕男女の間にあきの來る事。

あきかぜづき　秋風月（名）　八月の異名。

あきかぜの　秋風の（枕）　山吹の瀨（地名）千江の浦（地名）の枕詞。（萬葉）

あけう　阿膠（名）　膠の一種。精製したるものにて多く藥に用ふ。

あきた　秋田（名）　秋の田。●稻の實りたる田。

あきたる　飽足（自動四段）　滿足する。

あきたし　（形。形狀言ク活）　飽きていやになる。（雅）

あきたじょうのすけ　秋田城介（名）　出羽の國秋田の城を守る役。出羽介より兼務するもの。

あきれいたし（形。形狀言ク活）　甚しくあきるゝ。○濱松「夢の心地してあきれいたく覺ゆれど」

あきう　蜻蛉（名）　あきづに同じ。

あきづ　蜻蛉。蜻蜓（名）　虫の名。とんぼの古名。

あきづば　蜻蛉羽（名）　蜻蛉の羽。……多く薄き絹物を見立てゝいふ。

あきつかみ　明津神（名）　明かに目に見ゆる神の意。◎天皇陛下。●現人神。

あきづく　秋付（自動四段）　秋めきて來る。●秋となる。（雅）

あきつくに　秋津國（名）　秋津島に同じ。

あきつみかみ　明津御神（名）　明津神に同じ。

あきつしま　秋津島。蜻蛉州。蜻蜓洲（名）　我日本の異名。◎神武天皇大和の國形を見そなはして蜻蛉の臀咕（となめ）せるが如しと詔給ひしより大和一國の名となりしに始まり。孝安天皇の都を秋津島宮と名つけ給ひしより遂に廣がりて全國の稱となりたるなり。

あきづしま　秋津島（名）　あきつしまに同じ。

あきづひめ　秋津姫（名）　神の名。水門を司る神。

あきつす　秋津洲（名）　あきつしまに同じ。

あきなひ　商（名）　商賣。●商業。

あきらか　明　曇の無き有樣。●さやか。●はっきり。●明白。（形）—明らかなる。（副）—明らかに。

あきらむ　（自動下二段）　思ひ切る。●斷念する。

あきらむ　明（他動下二段）　明らかにする。●明らかに知る。

あきらけし　明（形。形狀言ク活）　明かである。●あかるし。

あきんど　商人（名）　あきびとの音便。

あきうど　商人（名）　あきびとの音便。

あきのかた　明の方（名）　惠方（えほう）に同じ。

あきのみや　秋宮（名）　皇后の御所。○順集「伊勢の齋宮秋の宮に渡り給ひて」

あきのしも　秋霜（名）　（一）秋置く霜。（二）刀劍の異名。

あきくさ　秋草（名）　花咲く秋の草の總名。

あきくさの　秋草の（枕）　結びし紐の枕詞。（萬葉）

あきやまの　秋山の（枕）　したべるしたび色なつかしきなどの枕詞。（萬葉）

あきま　明間（名）　（一）明きて居る處。●透間。（二）使用せずにある室。

あきあヨふ　明合(自動四段)　丁度うまく明きて居る。

あきさ　秋沙(名)　鳥の名。鴨に似て小さき水鳥。

あきさりごろも　秋去衣(名)　秋着る衣。(萬葉)

あきさりひめ　秋去姫(名)　織女の異名。

あきされば　(句)　秋になれば。●秋來れば。(雅)

あきさめ　秋雨(名)　秋降る雨。

あきさす　(自動四段)　買物をして手附をやる。(字鏡)

あきめく　(自動四段)　秋らしくなる。●秋の景色に移る。

あきじひィ　明盲(名)　あきめくら。(和名抄)

あきじこり　(名)　商醜賣の意にや。◎おっかぶせ賣り。●買かぶり。○萬葉「西の市に唯一人出で〻目並ばず買へりし絹のあきじこりかも」

あきびと　商人(名)　商賣する人。●あきんど。●商業家。

あきびめ　秋姫(名)　秋の田を守る神。

あゆ　鮎(名)　魚の名。形笹の葉に似て大さ四五寸より七八寸に至るものあり。春卵より生じて川にのぼり秋の末に至りて又川を下り卵を生み置きて死するもの。味上品にして美なり。

あゆ　(自動下二段)　汗、血、乳の出づる。●滴る。(雅)

あゆ　(自動下二段)　木實の熟して落つる。(萬葉)

あゆ　宵(自動下二段)　似る。●あやかる。○順集「君ははや人なみ〳〵に出で立ちて沈みに沈む我にあゆなよ」

あゆひィ　足結(名)　上古の服裝。袴(股引の類)を膝の邊にて結び固むる帶。鈴、玉などを着けて飾とす。

あゆがす　搖(他動四段)　ゆりうごかす。●動搖さする。

あゆむ　歩(自動四段)　足を働かして前に進む。●あかく。●あゆぶ。●歩行する。●徒歩する。

あゆふ　足結(自動四段)　足結にて足を結び固むる。(萬葉)

あゆのかぜ　(名)　東の風。●こち。(萬葉)

あゆぐ　搖(自動四段)　ゆれうごく。●動搖する。○千載「おもひかねあくがれいで〻ゆく道はあゆぐ草葉に露ぞこぼるゝ」

あゆぐ　(自動四段)　あゆむに同じ。

あゆまひィ　(名)　あゆみ方。●歩む樣子。●足つき。●歩調。○源氏「おもゝちあゆまひ」

あゆぶ　歩(自動四段)　あゆむに同じ。

あゆこ 鮎子(名) 鮎の子。◉小鮎。◉若鮎。

あゆみ 歩(名) 歩行。◉はこび。

あゆみいた 歩板(名) 蹈みて渡る橋板。(夫木)

あゆび 歩(名) あゆみ。◉歩行。

あめ 雨(名) 水蒸氣の滴となりて地上に降り下るもの。

あめ 天(名) 〔一〕天上界に神のましますところ。◉高天原。〔二〕虚空。

あめ 飴(名) 糎に麥のもやしを加へて造りたる甘き粘質の食品。

あめいろ 飴色(名) 色の名。水飴の色に似て赤みを帶びたる黄色。

あめり (自動ラ變) 有るめりの略。○源氏「父の大臣にも勝りざまにこそあめれ」

あめわかみこ 天若御子(名) 天人の一名。(先哲)

あめがした 天下(名) あめのしたに同じ。

あめつち 天地(名) 天と地と。◉てんち。

あめつちをふくろにぬひて 天地を袋に縫ひて(句) 古へ年の始に目出度詞文として女子どもの唱へたる詞。すなはち「天地を袋に縫ひて幸を入れて持たれば思ふ事なし」といふ歌の文句。……轉じては一條大納言家歌合に「石なごりの題にて「天地の袋の數し多かれば思ふ事なき今日にもあるかな」など他の袋の事に掛けてもよめり。(蜻蛉。狹衣)

あめつちのふくろ 天地袋(名) あめつちをふくろに入れて見よ。

あめつし 天地(名) あめつちに同じ。(萬葉東歌)

あめうし 飴牛(名) 飴色の牛。

あめの 天の(形) あまのに同じ。

あめのぬなゐ 天淳名井(名) あめのまゐゐの一名。(紀)

あめのめごと 天瓊琴(名) 玉もて裝ひたる神代の琴。(記)

あめのおしはヲ 天忍石(名) 高天原にある井の名。(大同二年本紀)

あめのうを 鯇(名) 魚の名。形は鱒に似て脊の黑きもの。

あめのやゐ 天八井(名) 高天原にある多くの井。(中臣壽詞)

あめのまなゐ 天眞名井(名) 高天にある井の名。(記)

あめのますひと 天益人(名) 日に〳〵繁殖する人間。

あめのあし 雨脚(名) 雨の降り來る筋。

あめのみかど 天帝(名) 天皇。

あめのみかど 天御門(名) あまつみかどに同じ。

あめのみかげ 天御蔭(名) 天の蔭として身を隱すところ。(祝詞式)

あめのした 天下(名) てんか。●世界。●國中。

あめく 吁(自動四段) わめく。●どなる。●わい〳〵言ふ。○字治「そこら集まりたる大衆異口同音にあめきて」

あめふり 雨降(名) 雨の降る日。●雨天。

あめしづくと 雨滴と(副) 雨滴の如く涙を流して。○著聞「雨滴と注ぎて」

あめびと 天人(名) てんにん。

あめもよ 雨夜(名) 雨の降る夜。

あみ 網(名) (一)魚鳥を捕る具。糸を編み合はせて作れるもの。(二)針金を目あらく編み合はせたるもの。餅魚など燒く具又物の隔などに張るにも用ふ。

あみ 海糠(名) 海老の一種。最も小さきもの。

あみいた 篋輿(名) あんだの古名。(和名抄)

あみど 編戸(名) 柴、竹などを粗末に編み合はせて作りたる戸。

あみとり 網取(名) 網にて捕る事。○萬葉「時鳥きけどもあむす網取にとりてなつけなかれず鳴くがれ」……此歌を網島の意に誤解して後世時鳥の異名とせり。

あみがさ 編笠(名) 藤又は菌草などを編みて造りたる笠。

あみだ 阿彌陀(名) 佛の名。西方淨土の主にて死者を善所に迎へ取るもの。●阿彌陀如來。●彌陀。●無量壽佛。

あみだに 阿彌陀に(副) 阿彌陀の像の後光を負ひたる形に。……笠など後の方にずらして被る事の形容。○「帽子をあみだにかぶる」

あみだだう 阿彌陀堂(名) 阿彌陀を安置する堂。

あみだぶ 阿彌陀佛(名) あみだぶつの略。

あみだぶつ 阿彌陀佛(名) 阿彌陀に同じ。

あみなはゥ 網繩(名) 海の網を引き寄する長き繩。

あみめ 編目(名) 編合はせたる糸と糸との透間。

あみす 浴(他動下二段) あむす。●あぶす。●あびせる。(雅)

あし 葦。蘆(名) 草の名。水邊に生じ葉は萱に似て大きく莖は竹の如くにして秋の頃薄に似たる花咲くもの。

あし 足。脚(名) 〔一〕地を歩く爲めに附きたる動物の體の枝。股、臑、脛、足首、趾など之に屬す。〔二〕歩み。〔三〕机、臺などを支へ持つ柱。〔四〕すべて足に似たる形又は働のもの。

あし (名) 錢。●金錢。

あし 惡(形。形狀言シク活) わろし。●善からず。

あじ 阿字(名) 梵語にてあといふ音の文字。密宗にて高妙なる意味の籠る文字として貴重するもの。(佛教)

あじ 亞字(名) 亞の字の形に木を組みて作れる事。欄干の形容に用ふ。

あじろ 網代(名) 〔一〕網の代りに構へて魚を捕る一法。川瀨に木を組み合はせ布を張りて魚の流れ來るを待ち捕るもの。宇治川にては古へ九月より十二月まで之を設けて琵琶湖より下る氷魚を漁し貢物に供へたり。〔二〕すべて網代木の樣に打違へに組む事。又は其物。……材料は多く竹、檜などの類にて之を薄く剝ぎ器物に作り又建築用に充つ。〔三〕網代車の略。

あじろばり 網代張(名) 網代編にて張る事。又は張りたる物。

あじろがた 網代形(名) 模樣の名。網代に編みたる形。

あじろかご 網代駕籠(名) 駕籠の一種。竹を網代に編みて造りたるもの。

あじろがさ 網代笠(名) 笠の一種。檜、竹などを網代に編みて造りたるもの。

あじろがき 網代垣(名) 竹など網代に編みて造りたる垣。

あじろぐるま 網代車(名) 御所車の一種。網代張の屋形を附けたるもの。公家略式の時に乘る。

あじろぐみ 網代組(名) 網代の形に組みたるもの。

あじろごし 網代輿(名) 網代張にしたる輿。

あじろあみ 網代編(名) 網代の如く打違へに編む事。又は其物。

あじろぎ 網代木(名) 網代に組合はせて打ちたる木。

あじろびと 網代人(名) 網代守に同じ。

あじろびゃうぶ 網代屏風(名) 屏風の一種。網代編にて造りたるもの。

あじろもり　網代守(名)　網代に魚の寄るを見張り居る人。●網代の番人。

あじろす　網代簀(名)　〔一〕網代木の間に搆へ置く簀。〔二〕網代の形に編みたる簀。

あしば　足場(名)　高き處へ上るために搆へたる足掛り。●足代。●あないひ。

あしばや　足早(名)　早足。●早あるき。

あしへん　足偏(名)　漢字の偏の名。路、趾、跗等の左の部分。

あしどり　足取(名)　足の歩みつき。●歩く足付。

あしを　足緒(名)　鷹にいふ詞。＝足革に同じ。

あしはら　葦原(名)　葦の多く生えたる處。

あしはらのなかつくに　葦原中國(名)　我日本の古名。太古の時四方の海邊ことごとく葦原にて其中に國を成し此處彼處に人民の住み居たる樣を名づけたるもの。

あしわけをぶね　葦分小船(名)　葦原を漕ぎ分けて行く舟。……葦に妨げられて進み兼ぬるもの故障りの多き喩などによく用ふ。

あしか　海獺(名)　海獸の名。形獺に似て時々海中の岩などに群集し居るもの。

あじか　簀(名)　農具の名。土など運ぶために竹にて作れるもの。

あしがに　葦蟹(名)　葦邊に群がり居る蟹。

あしがちる　葦が散(枕)　難波の枕詞。葦の花の散るといふ形容。

あしがる　足輕(名)　〔一〕歩兵。●雜兵。〔二〕德川時代最下級に位する武士の資格。戰時には歩兵たるべきもの。

あしがは　足革(名)　鷹の足に結ひ付くる長き革紐。

あしがかり　足掛(名)　高き處へ上る時に足を掛くるもの。

あしかた　足形(名)　足の形。●足跡。

あしがなへ　足鼎(名)　鼎の一種。三脚のもの。

あしがらをぶね　足柄小舟(名)　一説には脚の輕き小舟。一説には足柄山の木材にて作りし舟。(萬葉)

あしがけ　足掛(副)　年月を數ふるに云ふ詞。其年(又は月)より今年(又は月)までに跨りて。●數へ年(又は數へ月)にて。○「あしがけ七年」

あしがき 葦垣(名) (一)葦にて結びたる垣。(二)催馬樂の曲名。

あしがきの 葦垣の(枕) 舊りにし思ひ亂れて外間近し などの枕詞。

あしかし 足枷(名) 刑罰の具。枷の一種。足に纏ふもの。

あしかび 葦芽(名) 葦の芽立。

あしかびの 葦芽の(枕) 足なへの枕詞。葦の芽の如く脆弱なるの意。○萬葉「我聞きし耳によく似ば葦芽の足なへ我脊つとめたぶべし」

あしがも 葦鴨(名) 葦邊に群れ居る鴨。‖鴨に同じ。

あしかせ 足枷(名) あしかしに同じ。

あしよわ 足弱(名) (一)足の弱き事。●歩行の達者ならぬ事。(二)足弱き人。女、子供、老人の類。

あしよわぐるま 足弱車(名) 輪の弱き車。

あしゃう 亞相(名) 大納言の異名。

あした 朝(名) (一)あさ。●早朝。(二)轉じてあすに同じ。●明日。(俗)

あしだ 足駄(名) 下駄の一種。雨天に用ふる齒の薄く高きもの。

あしたどころ 朝處(名) 太政官にて天皇臨御し政務を聽かせ給ふ處。

あしだか 足高(名) 脚高く作れる臺。●腰高。

あしたづ 葦田鶴(名) (一)葦邊に下りゐる鶴。‖鶴に同じ。(二)古代箏の名。

あしつを 葦津緒(名) 和琴の糸の端を組糸にて百足虫などのやうに結びかゞりたる處。

あしづつ 葦筒(名) 葦の莖の内面にある薄き膜。

あしづの 葦角(名) 葦の芽生。

あしねはふ 葦根這(枕) 下の枕詞。根の這ふ地下といふ意。

あしなべ 足鍋(名) 三脚のある鍋。

あしなが 足長(名) 想像國の人種。兩足の非常に長きもの。

あしなへ 蹇(白動下二段) 足のきかぬ樣になる。●あしなへになる。

あしなへ 蹇(名) 足のきかぬ不具者。●ねざり。

あしなみ 足並(名) 多人數連び歩む時足の揃ひ方。●足取。●歩調。

あしらひ (名) あしらふ事。又は其物。

あしら (他動四段) あへしらふに同じ。

あしらふ 足占(名) 門に出でゝ我足にてする一種の

占。○萬葉「月夜よみ門に出で立ち足占して行く君さへや妹に逢はざらん」

あしのねの 葦の根の(枕) ねもごろの枕詞。ねの字を重ねたるもの。(萬葉)

あしのけ 脚氣(名) 病の名。かくけ。(和名抄)

あしのやへぶき 葦の八重葺(名) 葦を重ねて葺く事。又は其家。(後拾遺)

あしくび 足首(名) 足先。踝より趾までのところ。

あしや 葦屋(名) 葦にて葺きたる家。

あじゃり 阿闍梨(名) あざりに同じ。

あしま 芦間(名) 葦の並び生えたる其間。

あしげ 葦毛(名) 馬の毛色の名。黑毛の交りたる白色。

あしけし 惡(形。形狀言ク活) 惡しに同じ。

あしげひばり 葦毛雲雀(名) 馬の毛色の名。雲雀毛の交りたる葦毛。

あしぶ 芦火(名) あしびの轉。(萬葉東歌)

あしぶち 足斑(名) 馬の毛色の名。足の白きもの。

あしぶね 葦船(名) 葦にて編み作りたる舟。(記)

あしぶくろ 足袋(名) たびに同じ。(鎌倉大草紙)

あしぶき 葦葺(名) 葦にて屋根を葺く事。

あしぶみ 足踏(名) (一)足を踏み入るゝ事。(二)足にて舞踊などの拍子を踏む事。(三)足拍子。(三)體操の詞。一所に止まりて只足のみ上下する事。

あしこ (代) あの處。(あすこ。(あそこ。(かしこ。

あして 足手(名) 足と手と。(手足。(空穗)

あしで 葦手(名) 歌繪の一種。文字を葦の形に擬しなどして繪と字と交りに一首の和歌を書くもの。……歌繪を見よ。

あしでかき 葦手書(名) 葦手に書く事。(葦手の書方。

あしでのたち 葦手の太刀(名) 飾太刀の一種。鞘に葦手を書きたるもの。

あしでもじ 葦手文字(名) 葦手に書きたる文字。

あしあと 足跡(名) 歩みたる跡に殘る足の形。

あしきいき 惡息(名) 鬼蛇などの吐く毒氣。

あしぎぬ 絁(名) 絹織物の名。太く粗く織りたるもの。

あしきらひィもの 凶棄物(名) 祓の時に出だす贖物。あしき罪穢を祓ひ棄つる代表者。

あしゆひィ 足結(名) 机などの足を飾るために美しき糸など結ぶ事。○源氏「足結の組」

あしゅら 阿修羅(名) 八部の一つ。天界に隣すれども行は天に非ざる一種の鬼。(佛教)

あしゅらだう 阿修羅道(名) 修羅道に同じ。

あしゅらわう 阿修羅王(名) 阿修羅の王。常に天部の梵天帝釋と戰ふもの。

あしみ (名) 道の惡しき處。○夫木「暮れはて、道のあしみの知られねば」

あししろ 足代(名) あなゝひ。●足場。

あしび 馬酔木(名) 木瓜(はけ)の古名。

あしび 葦火(名) 葦を薪料にして焚く火。……海士の家の形容などに用ふ。

あしびやうし 足拍子(名) 〔一〕舞踊などする時足にて踏む拍子。〔二〕歩く足取。●歩調。

あしびたくや 芦火焚屋(名) 古代物語の名。但し世に傳はらず。(狹衣)

あしびき 足引(名) 枕詞より出でゝ◎山。

あしびきの 足引の(枕) 山の枕詞。裾を長く引きたる樣の形容。

あしもと 足本(名) 〔一〕足の側○「足もとから鳥が立つ」〔二〕足の下端。○「足もとはよろ〳〵と」

あしずり 足摩(名) 怒り又は恨みて足をもがく事。●じだんだ踏む事。(雅)

あしすだれ 葦簾(名) 葦にて編みたる簾。●葭簾。

あび 阿鼻(名) 地獄の一つ。……無間(むけん)を見よ。

あひる 家鴨(名) 水鳥の名。鴨に似て大きく肉も亦美味なるもの。人の家にて常に畜ふ。

あびき 網引(名) 網にて魚を引く事。

あも (名) 母。(萬葉東歌)

あもとじ (名) 母刀自。(萬葉東歌)

あもりつく 天降付(枕) 天より降り着くの意にて天の香山の枕詞。此山は神代の昔天上の香山が分れて降り來れるよし風土記に傳說あればなり。

あもる 天降(自動四段) 天上より降る。●天くだる。

あもし (名) 父母。(萬葉東歌)

あせ 汗(名) 〔一〕皮膚より分泌する一種の液。〔二〕齋宮の忌詞。血の異名。

あせ 吾兄(代) 兄、夫、又は他人の男子をも親しみて呼ぶ詞。

あぜ 畔。畦(名) くろに同じ。

あせとり 汗取(名) 襦袢の一種。汗の表着に染み出づるを防ぐ爲めに着くるもの。

あぜち

按察使(名)　官名。上古には諸國に置きて其國の法度を掌り國司の政務を視察せしむる役。中古に陸奥出羽にのみ置かるゝ事となれり。

あぜおり

畦織(名)　織物の一種。横糸を細くして畦の如く高低を爲し織りたるもの。

あぜくら

校倉(名)　四角の材木を角と角と接する樣に◇◇形に積み上げて建てたる倉庫。

あせみ

馬酔木(名)　木の名。あしびに同じ。

あせみづ

汗水(名)　水のやうに流るゝ汗。

あせも

(名)　汗の爲めに出で來る一種の吹出物。

あす

明日(名)　今日の次の日。●明くる日。

あす

淺(自動下二段)　〔一〕水の淺くなる。〔二〕交情などの淺くなる。〔三〕色のさむる。

あすはひのき

羅漢柏(名)　木の名。檜の木の類。

あすかぬ

飛鳥井(名)　催馬樂の曲名。

あすかがは

飛鳥川(名)　催馬樂の曲名。

あすら

阿修羅(名)　あしゅらに同じ。

あすらわう

阿修羅王(名)　あしゅらわうに同じ。

あすこ

彼處(名)　あそこ。●あしこ。●かしこ。